



저작자표시-비영리-변경금지 2.0 대한민국

이용자는 아래의 조건을 따르는 경우에 한하여 자유롭게

- 이 저작물을 복제, 배포, 전송, 전시, 공연 및 방송할 수 있습니다.

다음과 같은 조건을 따라야 합니다:



저작자표시. 귀하는 원저작자를 표시하여야 합니다.



비영리. 귀하는 이 저작물을 영리 목적으로 이용할 수 없습니다.



변경금지. 귀하는 이 저작물을 개작, 변형 또는 가공할 수 없습니다.

- 귀하는, 이 저작물의 재이용이나 배포의 경우, 이 저작물에 적용된 이용허락조건을 명확하게 나타내어야 합니다.
- 저작권자로부터 별도의 허가를 받으면 이러한 조건들은 적용되지 않습니다.

저작권법에 따른 이용자의 권리는 위의 내용에 의하여 영향을 받지 않습니다.

이것은 [이용허락규약\(Legal Code\)](#)을 이해하기 쉽게 요약한 것입니다.

[Disclaimer](#)

朴 一 昊 教授指導
碩士學位 請求論文

大江健三郎『人生の親戚』論

- 「悲しみ」と「救済」をめぐる -

2009

誠信女子大學校 大學院

日語日文學科

南 徽 貞

大江健三郎『人生の親戚』論

- 「悲しみ」と「救済」をめぐって -

朴 一 昊 教授指導

이 論文을 碩士學位論文으로 提出함

2008年 11月

誠信女子大學校 大學院

日語日文學科

南 徽 貞

認 准 書

南徽貞의 碩士學位 論文으로 認准함.

審査委員 _____ 印

審査委員 _____ 印

審査委員 _____ 印

誠信女子大學校 大學院

論文概要

본 논문은 오에 겐자부로(1935 -)(大江健三郎:이하 오에 라고 칭함)의 『인생의 친척』(人生の親戚:이하 人生の親戚로 표기함)에서 나타나는 「슬픔」과 「구제」의 문제에 대하여 분석하였다.

오에는 동경대 재학시절 등단하여, 『사육』으로 아쿠타가와 상을 수상한 이후, 끊임없이 작품 활동에 전념해왔다. 1994년 노벨문학상을 수상하여 문학적 보편성을 획득한 국제적인 작가로 부상했다.

최근, 사카모토 타다오에 의해 「품격을 갖춘 수작」으로서 『人生の親戚』을 첫 번째로 소개한 바 있다. 많은 평론가들에 의해 이질적인 작품이라고 평가되어지는 『人生の親戚』은 그 소재에 있어서도 오에의 타 작품과 비교하여 다른 성격을 갖고 있다고 생각된다. 이에 관하여 오에는 「자기 자신을 치료할 생각으로 이때까지의 소설 세계와는 다른 것을 다른 방법으로 쓰기로 했다」고 언급하고 있다.

오에의 주된 테마인 「장애아와의 공생」에 있어서 중요한 과제가 되고 있는 것이 「슬픔」과 「구제」의 문제라고 할 수 있겠다. 오에 문학에 있어서 큰 전환기의 작품으로 보여 지는 『人生の親戚』에서는, 「슬픔」과 「구제」의 문제를 중심으로 한 특징적인 양상이 주목된다. 『人生の親戚』에 있어 마리에의 가족을 둘러싼 장애아의 자살 사건이, 궁극적으로 나타내고자 하는 「슬픔」의 문제는 무엇인가. 또, 오에의 문학 세계에 있어서 「구제」의 문제는, 『人生の親戚』을 통해 어떻게 제시되고 있는가에 대하여 고찰하였다.

「나」라고 하는 화자를 둘러싼 배경은, 실제 오에가 체험했던 것에 근거 하고 있기 때문에, 메타픽션의 방법으로 리얼리티를 살리려는 의도가 엿보인다. 소설 속에서, 미학으로서 그려져 온 「슬픔」의

문제가, 「구제」를 요구하는 현실의 문제에 접근하여 다루어지고 있는 것이다.

「나」의 슬픔에 이어지고 있는 현실 레벨의 「세계의 슬픔」은, 소설 『핵시대의 숲의 은둔자』 『홍수는 나의 영혼에 이르러』, 에세이 『히로시마 노트』 『오키나와 노트』 등에서 주제로서 다루어온 핵시대의 위기 및 종말의 시대 인식과 무관하지 않다고 생각된다. 『人生の親戚』속에서 「슬픔」의 문제는, 지적 장애아와 신체장애아의 「슬픔」, 그들의 모친 마리에의 「슬픔」, 그리고 화자인 「나」를 둘러싼 「세계의 슬픔」으로까지 확장되고 있는 것이다.

전후 일본이라고 하는 토양에서 자란 오에가 느낀 「슬픔」은 역사적인 인식과 무관하지 않을 것이다. 또, 장애아의 탄생이라고 하는 사건과 조우하여, 슬픔 속에서도 장애아와의 공생을 주제로 하는 새로운 문학 세계를 그려 왔다.

오에는 「슬픔」에 민감하게 반응하는 작가라고 불린다. 많은 작품에서 비탄으로 가득 찬 인물을 설정하고, 그 인물을 둘러싼 배경에는, 실존 문제, 현 정치 상황의 모순, 핵시대의 불안 등을 그려 왔다.

『人生の親戚』속에서 나타나는 「슬픔」의 실체는 표면적으로는 장애를 가지고 있는 두 명의 아이들의 자살이다. 두 명의 장애아가 자살하는 사건으로부터 볼 수 있는 「high grief(극도의 비탄)」은 여주인공 마리를 통해, 어떻게 받아 들여 어떠한 과정을 거치고 구제에 이르는지가 중요한 문제가 된다.

『人生の親戚』에서, 마리에의 두 명의 아들로서 신체장애아와 지적 장애아가 등장하는 것이 주목된다. 마리에의 육체의 고뇌와 정신의 고뇌를 연상시키는 설정이라고 생각된다. 카와이 하야오는, 두 명의 아들의 죽음을 「정신과 신체라고 하는 십자가를, 무산과 미치오는 짙

어지고 죽다」라고 표현하고 있다. 또, 그것을 「현대인의 정신과 신체의 분열」에 연결 짓고 있다.

오에는 다른 작품에서 장애아를 그릴 때, 장남 히카리를 모델로서 「이 세계의 종말인 현대에 있어서의 신과」같은 무구의 세계를 표현했지만, 『人生の親戚』에서 보이는 장애아는 고통의 세계의 피해자처럼 그려지고 있다. 미치오는 괴롭힘을 당한 경험의 공포 때문에 사고를 당해 하반신 마비가 되어 자살을 결심하고, 정신 장애아인 무산은 미치오가 권하여 자살을 선택한다. 「나」의 슬픔과 이어지는 「죽음의 가능성」이, 『人生の親戚』에서는 장애아의 자살이라고 하는 극단적인 설정으로서 그려지고 있다.

오에는, 『人生の親戚』을 통해 궁극적으로 「장애아의 자살과 같은 부조리한 사건에 의해서 심신의 분열을 초래한 주인공의 구제」의 의미를 추구하고 있다고 말할 수 있다.

마리애가 인생의 만년에 구제를 구하는 과정에서는, 공간을 중심으로 그려지고 있다. 공간을 둘러싼 전개가 구제의 문제와 어떻게 관련되어 있는지에 대한 고찰은 작품의 이해에 있어서 중요한 의미를 갖는다. 『人生の親戚』에서 볼 수 있는 공간의 설정은, 일본에서 멕시코의 농장까지 이동되고 있다. 마리애는 죽음의 직전까지 멕시코의 농장에서 현지의 궁핍한 여성을 위해 힘을 다했다. 그러한 연유로, 성녀와 같이 숭배되었던 것이다. 멕시코의 농장이라고 하는 공간의 설정은, 오에가 멕시코에 체재한 경험을 토대로 얻어진 것이다. 작가 자신이 체재한 경험이 있는 공간의 설정은, 작가 자신의 구제로도 이어지고 있는 것은 아닐까 생각된다. 또 구제의 문제에 있어서의 「죽음과 재생」에 대해서는 「기억」이라고 하는 장치와 역사 인식이라고 하는 점에서 생각할 필요가 있다.

오에에게 있어서 자신의 슬픈 체험을 소설로 그려내는 것은, 플리다 칼로의 「부상 자화상」과 같은, 자기 치료의 수단이 되었다고 말할 수 있겠다. 『人生の親戚』에서, 문학의 인용에 의해 「슬픔」과 「구제」의 문제가 재발견되고 있다. 또, 『人生の親戚』을 통해 「슬픔」이 없는 「구제」의 문제는 무의미하다는 것을, 현실의 비극적인 이야기가 아닌, 신화적인 이야기로서 그리고 있는 것은 아닐까 생각된다.

최근 오에는, 『人生の親戚』의 다음 작품인 『치료탑』을 재독했을 때에, 「그 세부로부터 시작되어 전체의 거의 모든 곳에 가득 차 있는 슬픔의 감정에 놀랐다」라고 한다. 장애를 가지고 있는 장남 히카리의 출생 이후, 중요한 모티프로써 파악해 온 「슬픔」의 문제는 『人生の親戚』에서 장애아의 자살 문제를 둘러싼 여성의 인생을 통하여, 세계의 슬픔까지 확대되고 있다. 역설적이지만, 「슬픔」이 있기 때문에 「구제」가 요구된다. 이러한 문제의식은, 「구제」를 둘러싼 「위기와 투쟁」을 반복하여, 끝으로 「슬픔」의 재발견을 통해 이야기를 맺고 있다.

『人生の親戚』을 통해서, 「슬픔」을 적극적으로 받아들이는 것이야말로 「구제」에 이를 수 있는 가능성을 시사하고 있다는 점에서, 오에 문학을 구제의 문학으로서 새롭게 이해할 수 있다.

目 次

論文概要

I. 序論	1
II. 本論	
1. 「悲しみ」の位相	5
1.1 「悲しみ」について	8
1.2 倉木まり恵の「悲しみ」	11
1.2.1 肉体と精神の悲哀	12
1.2.2 障害児の母親としての痛傷	17
1.3 「僕」と障害児たちの「悲しみ」	22
1.3.1 障害の自覚	27
1.3.2 障害児の自殺	35
2. 「救済」の問題	41
2.1 自己救済の危機	44
2.2 自己救済の闘争	52
2.2.1 空間をめぐる	53
2.2.2 死と再生をめぐる	57
2.3 「救済」と「悲しみ」の再発見	64
2.3.1 「救済」の文学	66
2.3.2 「悲しみ」と「救済」の再認識	71
III. 結論	77

参考文献

ABSTRACT

I . 序論

大江健三郎（以下、大江）は一九三五年愛媛県に生まれて、一九五八年東京大学仏文学科の在学中『飼育』で芥川賞を受賞した。その後、一九六四年『個人的な体験』で新潮文学賞、一九六七年『万延元年のフットボール』で谷崎潤一郎賞、一九七三年『洪水はわが魂に及び』で野間文芸賞、一九八九年『人生の親戚』で伊藤整賞などを受賞、一九九四年にはノーベル文学賞を受賞している。

芥川賞の受賞の当時、大学生であった大江について新聞と雑誌は、みずみずしい感受性やその斬新さで文体を格上げしたと批評し、彼は一挙にマスコミの注目を受けた。初期作品からみられる彼の文学的な才能は、芥川竜之介に匹敵するといわれたのである。¹⁾しかし、『万延元年のフットボール』以後は作品の難解性が指摘され、その傾向が続いてきた。『万延元年のフットボール』は、固着的イメージや晦渋な文章が発表当初から注目されていたが、作品としての完成度については長いこと保留してきた。²⁾『万延元年のフットボール』以後、共通的に「固着的イメージや晦渋な文章」が大江の文学世界の特徴としてあげられるが、『人生の親戚』を基点として以前の作品とは違う性格を見せている。³⁾

最近、坂本忠雄によって、平成文学の「上質さをそなえた秀作」として紹介された⁴⁾『人生の親戚』は、作家であるKという語り手が倉木まり恵の悲しみに満ちた人生を描くものである。作家Kは大江を連想させ、物語は現実世界の事

1) 一条孝夫「大江健三郎と川端康成」『帝塚山学院大学研究論集文学部』Vol.42(20070000)2頁。
「学生作家大江健三郎の出現に芥川の再来を見たようである。死体運搬のアルバイト、犬殺し、カリエス患者、質学生など特異な題材をアツクアツク初期作品には、なるほど『羅生門』や『地獄恋』の作者を思わせる才気が感じられる。」

2) 一条孝夫『大江健三郎その文学世界と背景』（和泉書院、1997）53頁。

3) 中村泰行『大江健三郎—文学の軌跡』（新日本出版社、1995）7頁。

大江はインタヴュー「未来を愛する人のために」で彼の文学の行程を四つに区切っている。『人生の親戚』は、最後の第4期に属する。

4) 『中央公論』、2008年7月号、174頁。

実をモチーフとして、私小説の形式を取っている。そして、これまでの作品では「障害児」の姿が長男光のみを念頭に置いて書かれたのに対して、『人生の親戚』ではフィクションの第二、第三の「障害児」の姿を描かれている。また、大江の文学世界における障害の「悲しみ」は、さかのぼって「広島」の歴史的な「悲しみ」と密接な関連を持っている。個人的な事件を、時代的狀況と結び付けて捉えたのである。

作家として活動しはじめた大学生時代から⁵⁾、三十四年が過ぎた時に書かれた『人生の親戚』は、他の作品に比べて異質的ないくつかの特徴を持っている。これについて 安藤始は、次のように述べている。

『人生の親戚』は大江のこれまでの小説とはかなり異質な作品であった。この小説の主人公はこれまでのように大江の分身に近い人物ではなく、倉木まり恵という女性であり、彼女の半生が描かれていたからである。⁶⁾

『人生の親戚』は「とても誤解されやすい小説」⁷⁾といわれ、それ以前に書かれた作品と違う性格を有する。女性を主人公とした最初の小説であり、「更にこの小説以後、大江の小説の多くの主人公や語り手が女性となっていた」⁸⁾のである。

『人生の親戚』が「異質な作品」である理由について大江は、「自分自身を治療するというつもりで、それまでの小説の世界とは違ったものを、違った方で書いてみることにした」⁹⁾という。大江にとって、『人生の親戚』は、人生の

5) 1955年9月、東京大学機関紙に掲載された『火山』。

6) 安藤始『大江健三郎の文学』（おうふう社、2006）236頁。

7) 川本三朗「悲しみは物みなを親密にする」『大江健三郎』（小学館、1995）229頁。

8) 注6、上掲書、242頁。

深い「悲しみ」を治療する「救済」の物語として書かれたものである。大江は、さらに『人生の親戚』が書かれた背景について次のように述べている。

『人生の親戚』は、私にも特別な小説です。…（略）私は、始めて鬱病のような状態に—最近でいう「デプレッション」、昔の言葉でいえば「メランコリア」です—なった時期がありました。…（略）もともと私にはヒロイックでかつユーモアのある、しかし悲劇におちこむ女性へのあこがれがあった。実在するモデルはいませんが、それまでの目によるスケッチの積み重ねが細部をなしています。この小説を書いてしまうと、それまでのメランコリアが雲散霧消した。¹⁰⁾

大江が「私にも特別な小説」であると紹介したのは、自分自身を治療する「救済」の小説であるからと思われる。大江が持っていた「ヒロイックでかつユーモアのある、しかし悲劇におちこむ女性へのあこがれ」が倉木まり恵の人生で現されたのである。大江が「この小説を書いてしまうと、それまでのメランコリアが雲散霧消した」というところに注目される。

本研究は、上のような作家の経験に着目して、『人生の親戚』の中でみられる「悲しみ」の問題と「救済」の問題が、どのような関連性を持っているのかについて考えようとするものである。従来の研究において、「悲しみ」と「救済」の問題の関連性に着目し、『人生の親戚』における大江の作意を分析する試みは、管見の限り見当たらない。

『人生の親戚』において倉木まり恵の家族をめぐる障害児の自殺事件が、究極的に示そうとする「悲しみ」の問題は何なのか。作家が示そうとした「悲しみ」における特別な意図について考えてみたい。また、大江の文学世界にお

9) 大江健三郎『大江健三郎作家自身を語る』（新潮社、2007）154頁。

10) 注9、上掲書、154頁。

る「救済」の問題が、『人生の親戚』を通してどのように提示されているのかについて論を進めたい。

1. 「悲しみ」の位相

大江は、多くの作品の中で、悲嘆に満ちた主人公を設定し、人間の実存問題に繋がる「悲しみ」の問題について積極的に取り組んできた。『人生の親戚』は、「悲しみ」の問題が暗に提示されている以前の作品とは違って、「悲しみ」の問題を表題の全面に掲げている。次のように「悲しみ」の問題は、「人生の親戚」というタイトルから始まる。

『人生の親戚』という表題の意味はもともと「血のつながった仲ではないが、生きてゆく上で苦難をともにするうち、まさに親戚のようになった真の友・仲間」という普通の意味で使われているのだが、最後に「僕」はその言葉がプルタルコスの中で「悲しみ」の意味で使われていることを知り、そちらの解釈を選ぼうとする。「悲しみ」を人生の基底に置こうとする大江健三郎らしい試みということができる。¹¹⁾

つまり、『人生の親戚』の中で、捉えられている「悲しみ」の問題は、人生の基底に置かれている「悲しみ」、人生を生きて行くものたちの宿命である「悲しみ」を意味しているといえよう。その「悲しみ」は、大江を連想させる「僕」という語り手が倉木まり恵の人生を近いところで観察する形で述べられている。大江を連想させる「僕」が単に観察者の役割のみを果たしているのではなく、倉木まり恵の人生の「悲しみ」が「僕」の「悲しみ」と緊密な関係を持って状況が進んでいくことが注目される。

物語が始まる倉木まり恵との出会いの場面には、実際大江の体験が描かれている。大江は、自身が韓国独裁政権に対するハンガ・ストライキに参加した

11) 川本三朗「シェルターから癒しの塔へ」『大江健三郎』（若草書房、1998）158頁。

事実と、倉木まり恵がその場で存在したというフィクションをいっしょに描き出している。

韓国の若い詩人が「反共法違反」のかどで投獄され、さらには死刑判決を受けた。そこで当の詩人の社会的活動に関心を持ち、直接連絡を保ってもきた知識人グループを中心に、韓国政府に抗議するハンガ・ストライキが計画されたのだ。。。こういう政治的雰囲気の中なかで、時々テントの中なかを覗き込んで気を張り、それよりほかはテントの外周りで効率よく立ち働いているまり恵さんの存在は、いかにも個人的な励ましをつたえてくれるものだった。[大江健三郎『人生の親戚』（新潮社、1989）11頁。以下、『人生の親戚』と略す。]

「僕」という語り手をめぐる背景は、実際大江が体験したことを根拠としているため、メタフィクションの方法でリアリティを生かそうとする意図を窺わせる。このような小説の方法は、「悲しみ」の問題を、救済を求める現実の問題としてとらえている大江文学の特色といえよう。

川本三朗は、大江の文学世界の「悲しみ」について下のように述べている。

大江健三郎は世界の「悲しみ」に誰よりも敏感に反応する。大江健三郎にとって世界はいつも悲しみの涙を流している。そしてイエーツの詩句の言葉を借りれば「（大江健三郎の）様ざまな思いはなにかわれらの悲しみの苦さを柔らげてくれる薬草を摘んでいる」。¹²⁾

大江の眼に映した世界は、「いつも悲しみの涙を流している」有り様である。

12) 注11、上掲書、158頁。

その「悲しみ」を治療するために、「薬草を摘んでいる」ように、小説を書いてきたともいえよう。

ここで説いている世界の「悲しみ」は、小説『核時代の森の隠遁者』¹³⁾『洪水はわが魂に及び』¹⁴⁾エッセイ『広島ノート』¹⁵⁾『沖縄ノート』¹⁶⁾などで主題として捉えてきた核時代の危機・終末の時代意識と無関係ではないと思われる。

『人生の親戚』における「悲しみ」の問題は、母親倉木まり恵の「悲しみ」や、知的障害児と身体障害児の「悲しみ」だけでなく、語り手である「僕」をめぐる世界の「悲しみ」まで抱えたものである。しかし、川本三郎によって「オーバな小説」¹⁷⁾と指摘されたとおり、尋常ではない「悲しみ」の問題を提示するところの文学的な必然性においては、疑問の余地がある。それで、「悲しみ」の極大化を通して大江が表そうとした意図と背景について分析してみたいと思う。

13) 『中央公論』1968年8月号

14) 新潮社、1973

15) 岩波書店、1965

16) 岩波書店、1970

17) 注7、前掲書、230頁。

1.1 「悲しみ」について

「悲しみ」の辞典的な意味は、「いとおしむこと。また、あわれむこと」であるが、一言で表現できない人間の感情であるのに違いない。文学を通して、人間の「悲しみ」の感情を描きだすことは、人生の重大な不幸や悲惨を題材とした「悲劇」という型式で継承されてきた。芸術による生の苦悩の救済というモチーフは、20世紀の芸術論に大きな影響を与えた。¹⁸⁾

「悲しみ」に関する学説は、Freud(一九一七)のいう『悲哀の仕事：Trauerarbeit』という概念にさかのぼる。この学説は、次のようである。

悲哀、悲嘆 (Grief)とは、愛するものや、よりどころとなる祖国や自由、理想などを喪失した時の反応であると定義した。悲しみの心理過程については、一九四二年、ボストンの大火災で四百人もの人が亡くなった時、被災者や遺族に関わったリンデマンの研究や、広島の子供の被災者の調査研究 (リフトン) が初期の研究といえよう。¹⁹⁾

「悲しみの心理過程」の初期の研究の対象である広島事件は、日本歴史上の最大の悲劇であった。戦後の日本という土壌で育った大江が感じた「悲しみ」は、そのような歴史的な認識と無関係ではないだろう。それに、大江は障害児の誕生という運命に遭い、悲しみの中でも障害児との共生を主題とする新しい文学世界を追求してきた。

大江は「悲しみ」に敏感に反応する作家だと言われる。多くの作品で悲嘆に

18) 『広辞苑』第六版 (岩波書店、2008) の「悲劇の誕生」による。

ニーチェの『悲劇の誕生』 (Die Geburt der Tragödie ドイツ、1872年) は、ギリシア悲劇をアポロ的とディオニュソス的という対概念を用いて論じるものである。

19) 若林一美「死別による悲しみ—セルフヘルプグループの役割について—」『山梨英和大学紀要』、山梨英和大学、Vol.3(20041200)、67頁。

みちた人物を設定し、その人物をめぐる背景には、実存の問題、現政治状況の矛盾、核時代の不安などを描いてきた。

『人生の親戚』の中で表される「悲しみ」の実体は表面的には障害を持っている二人の子供の自殺である。実際、子供の自殺による親の苦痛は、回復が不可能な状況まで至ると言われる。

子の死は、high grief（苛烈な悲嘆）といわれるほど、死別の悲しみのなかでも、とくに悲惨からの回復が困難であるといわれているが、その死因が自死の場合は…（略）遺族は極度の緊張とストレスのもとに暮している。20)

二人の障害児が自殺する事件から見られる「high grief（苛烈な悲嘆）」は、女主人公倉木まり恵に、どのように受け入れ、どのような過程を経て、救済に至るのが重要な問題になる。

『人生の親戚』における「悲しみ」は、大江の思想が反映され、多義性を持っていると思われる。作品全般に流れている「悲しみ」の感情は、障害児の自殺と関わっているが、それは虚構の世界のみではなく、大江を連想させる語り手「僕」という存在によって現実世界に繋がっている。

大江は、自分の体験した障害児の出生をめぐる、『空の怪物アグイ一』²¹⁾『個人的な体験』²²⁾などで「悲しみ」にみちた葛藤と救済を描いている。多くの作品で、障害児との共生を描いているが、その根底には「悲しみ」の根を下ろしている。障害児の誕生その直後、訪問した広島で、残酷な歴史の痕跡と沈黙してきた被害者の人間的な威厳を発見したという。このような経験

20) 注19、上掲書、59頁。

21) 『新潮』1964年1月号

22) 新潮社、1964

は、大江にとって「悲しみ」の根源になったのではないか。広島の悲惨な状態を作家自身の個人的な問題と重ねて受け入れたともいえよう。

『人生の親戚』の中で見られる「悲しみ」は、作家自身が体験した「悲しみ」と歴史的な世界の「悲しみ」がともに投影されて描かれたものと思われる。大江にとって、文学における「悲しみ」の世界は、人間が体験する現実を反映することによって、「悲しみ」から「救済」への方法を模索する人間の自画像であろう。

1.2 倉木まり恵の「悲しみ」

『人生の親戚』は、女主人公の倉木まり恵の人生をもとにして映画シナリオを書く作家「僕」の視点で描かれている。彼女の人生の「悲しみ」の問題をどのような物語として描いているのかが注目される。

女主人公の倉木まり恵は離婚した後、障害児であるムーサンをひきとり、名門の私立小学校に在学する弟の道夫を夫に渡して暮している。語り手である「僕」がまり恵に出会ったのは、韓国の詩人が死刑判決を受けた事件のため行われた三日間のハンストが切っ掛けである。まり恵は当時、障害を持っている「光」のため来ることができなかった「妻」のかわりに、「僕」のために参加したのである。

横浜にある女子大の先生であるまり恵は、アメリカの女性作家であるフラナリー・オコナー研究者で、知的な魅力を持っている女性として描かれている。まり恵はそのオコナーから至大な影響を受けている。まり恵が離婚した後、障害児の母親として担う苦難においても明るさを失わなかったのは、肉体の病の中にも負けなかったオコナーの影響もあったためである。

彼女の不幸は知的障害児であるムーサンの誕生から始まり、離婚や、交通事故で下半身麻痺になった次男道夫の養育、二人の障害児の面倒を見てくれた母親の死のようなことだけで終わらなかった。

その後、あまりにも「酷たらしい事件」が起ってしまったのは、まり恵に形容できない絶望をもたらした。兄弟は家族の思い出の場所である伊豆高原の別荘に出かけ、リアス式海岸の崖で自殺してしまったのである。

まり恵は二人の子供を失い、自分には自殺を選択することもできず、苦しみの中で「信仰」に傾くことになるが、「信仰を持たないもの」として救済を求める。宗教集団の「集会所」に入会したものの、結局「集会所」を出てすぐア

メカに渡り、性的に奔放な生活を送る。

奔放な生活のために人々の非難を受けるが、まり恵は不幸なミステリーについての質問を繰り返し、絶望の時期と彷徨の日々を経て、結局メキシコで貧しい農場の女性のため残りの命を捧げる。このような彼女の一生の苦悩をたどることによって、大江が窮極的に表そうとした「悲しみ」の意味が窺えると思う。以前の作品とは異質な女性の物語の展開で、女性として背負って生きた肉体の悲哀と精神の悲哀が表されていると思う。また、障害児の母親としての「悲しみ」である点は、ほかの大江の作品の中で類をみない特徴であるといえよう。

1.2.1 肉体と精神の悲哀

『人生の親戚』の中で、倉木まり恵の二人の息子がそれぞれ身体障害児と知的障害児として登場するのが注目される。倉木まり恵の「肉体の苦悩」と「精神の苦悩」を連想させる設定であると思われる。河合隼雄は、二人の息子の死を「精神と身体という十字架を、ムーサンと道夫は担って死んだ」と表現している。また、それを「現代人の精神と身体の分裂」²³⁾に結びつけている。

ところで、倉木まり恵の外形的な特徴を詳しく描いているのは、彼女の持っている「悲しみ」の心情を極大化させる。まり恵の外貌を描写する場面で、頻繁に比喻されるのがベティ・ブープのイメージである。

ばかばかしい滑稽なベティ・ブープのイメージは、知的な女性のまり恵とは相応しない設定であると思われる。一九三〇年代アメリカのTVシリーズの主人公であるベティ・ブープは、当時のエロチシズムのシンボルであった。まり恵がベティ・ブープに似ているのは彼女自身も言及している。

23) 河合隼雄「解説」『人生の親戚』（新潮社、1989）262頁。

— 学生たちがレトロの文房具でベティ・ブープを集めていて、私のことを「ベティさん」と呼んでるらしいのよ。その子たちはもとより、私も、ベティ・ブープの映画を見たことはないけれど………

まさにベティ・ブープ式の唇を、われながら照れくさがって、まり恵さんは自分から滑稽化する話しぶりをしたのだろう。そういえばと僕は、むしろ形の良い額のまわりのほつれ毛とか、翳っていた眼を、次の瞬間、まさに明るく張る仕方に、確かにベティ・ブープの面影を見出していた……

[『人生の親戚』17頁。]

上で述べたように滑稽化されたベティ・ブープのイメージは、二人の息子が自殺した事件の後、「僕」の夢の中で、「悪の女神」のような幻像として出現する。まり恵の悲劇的な事件の衝撃に襲われた「僕」は、奇異な夢を見る。「僕」の奇異な夢語りは、「ベティさん式の派手な唇を動かして話すのだ」という叙述から始まる。夢の中で、まり恵は、次のように語っている。

なんということを、なさるのかねえ。子供たちが、誘われることもなしに、スルリと向うへ行くはずはないわ。私はそういうたくらみをしたカミに、しっぺ返しをしてやろうと思う。先方があくまでも「善」だといいはるならば、こちらは「悪」の事業を起こしてやりたい。

[『人生の親戚』86頁。]

このような夢の幻像を通して、「僕」は「エロティックに挑発するベティさんのイメージ」の性的興奮と「悲傷の思い」を感じる。ここで「悪」は、まり恵に起った不条理な事件による神に対する反感を示し、彼女の「悲しみ」の感情を内包しているとみられる。

「悪」のイメージを含んでいるベティ・ブープの容貌のまり恵の人生が、アイロニーと思われるのは、まり恵の生涯の末年には「善」のイメージの聖女として呼ばれるからである。「悪」のイメージは、まり恵の肉体的な特徴にみられるが、聖女として呼ばれた「善」のイメージは、彼女の精神的な高揚の結果としてみられるのである。

倉木まり恵さんは、生涯の最後を、数年間にすぎぬではあるが、メキシコメスティソの田舎で農場の経営に参加し、そこで働くインディオや混血の人びとの衛生管理に力をつくした。そのうちまり恵さんは、農場の開かれた、アズテックの遺跡のピラミッドが高い山巔から見下ろしている村でのみならず、農場が貧しい働き手をすくいあげた、周辺のいくつの村でも、聖女のように崇められた。 [『人生の親戚』7頁。]

彼女は生涯の最後に、「聖女」のような姿でメキシコの貧しい農場の人々のために献身したのである。倉木まり恵の「聖女」と呼ばれた生涯を「世界最終の女」というタイトルで映画化しようとしたのも、そのような彼女の献身が理由であろう。

このように聖女のイメージとエロチシズムのシンボルであるベティ・ブープのイメージがまり恵という女性に共存しているのは、何らかの象徴性を持っていると思われる。そして大江が女性を主人公にしたのは、明確な意図によるものであろう。

極端的なイメージの対立を設定しつつ、平凡な人間とは思われぬ女性像を描いているのは、神話的な仕掛けが窺えるところである。大江文学のキーワードとして、<M(メイトリアーク) / T (トリックスター)>という文学的概念がある。²⁴⁾

24) Mは英語のmatriarchの略語として、①女家長、女族長。②女首領であり、Tは英語の

柘植光彦は、「<M>のイメージは『人生の親戚』での倉木まり恵によって、神話的に再構成されることになる」²⁵⁾と述べている。また、伊藤久美子は、「『人生の親戚』で<T>（トリックスター）の存在もみられる、それは語り手<僕>である」と指摘している。²⁶⁾

倉木まり恵は、「神話的な再構成」によって人生の超越者のような姿をみせている。まり恵の物語がイエーツの引用とともに宗教的ヴィジョンを呈示しているのは、「神話形成」と密接な関係にある。²⁷⁾

おそらくこのオーバーといってもいい悲惨の連続は、大江健三郎が現実レベルからより開かれた神話的レベル（この小説のなかの言葉を借りるならば「宇宙意志」が反映されたレベル）へと押し上げるために必要な、知的で文学的な仕掛け・方法なのだ。²⁸⁾

川本三郎が説いているように、『人生の親戚』の中には、まり恵の悲惨な事件を「現実レベルからより開かれた神話的レベル」へと押し上げて描こうとする大江の意図が窺える。

この「悲しみ」にみちた物語を導いていく女主人公のまり恵を「神話的に再構成」する力は、小説の最後まで、人生の「悲しみ」の問題に緊張感を与える原動力になると思われる。そして、大江作品の神話性がみられる作品群は「記憶」という媒介と連関している。蘇明仙は、「現在の可能性が秘められ

tricksterの略語として、①詐欺師。②へてん師を意味する。

25) 柘植光彦「大江健三郎<キーワード>M(メイトリアーク) /T (トリックスター)」『国文学』1990年7月号、131頁。

26) 伊藤久美子「大江健三郎『人生の親戚』の語り手」『文学研究』2007年4月号、29頁。

27) 蘇明仙『<神話形成>の文学世界と歴史認識』（花書院、2006）7頁。

28) 注7、前掲書、233頁。

ている過去、その過去を現在化する一つの方法が記憶であり、人間の集団的な記憶が神話」²⁹⁾であると述べている。話し手である「僕」が死んだまり恵を「記憶」する形で、またその「記憶」を、神話のような映画シナリオとして再現する物語で描き出している。まり恵の人生が、「＜神話形成＞的手法」によって彼女の「肉体と精神の悲哀」が描かれているのである。一人の女性の「悲しみ」に普遍性を与えるために、ノーマ・フィールドが指摘するように、「伝統的神話」の「絶対的説得力」が働いているのである。

伝統的神話とは特定の共同体のアイデンティティーを維持するのに働くのであって、その成員にとってその神話が絶対的であるからこそ普遍的に思えるのである。そもそも神話が絶対的説得力を発揮するかというと、それは（擬似的にせよ）自然の力を動員しているからである。³⁰⁾

上で述べたように「普遍性」と「絶対性」を持つように扱われる神話性は、大江の文学世界の特別な仕掛けである。大江は、神話的装置による「普遍性」と「絶対性」を、女性の物語に書き込んでいる。小説の最後で、倉木まり恵がメキシコの農場で、男性に強姦されたことを言及している。それは、死の直前で女性としての不幸を示し、倉木まり恵という女性の人生がいつそう「悲しみ」にみちた不幸な物語として感じられる。しかし、彼女は死の前で「Vサイン」を示し、物語の最後まで平凡な人間としては想像できない行動を見せてくれる。その「Vサイン」を菅野昭正は次のように述べている。

「暴力的、攻撃的」なマッチョであるミツオに強姦されてから四週間

29) 注27、前掲書、68頁。

30) ノーマ・フィールド「ネイティブとエイリアン・汝と我―大江健三郎の神話・近代・虚構」注11、前掲書、12頁。

後、つまり妊娠の不安が消えたとき、ミツオに報復が加えられたのは、
マチスモ
《男性原理》というかたちを取って荒れ狂った不条理な暴力にたいす
る、女性としての最後の反撃を意味していたのではあるまいか。31)

末期癌で死の運命に会う倉木まり恵が見せた「Vサイン」は、不思議な行動であるが、「男性原理の不条理な暴力」に対する「女性としての最後の反撃」であったのである。彼女が人生の最後のシーンで見せてくれた「Vサイン」は、肉体と精神の悲哀を乗り越える人間の救済への可能性を示唆しているといえよう。

1.2.2 障害児の母親としての痛傷

「僕」とまり恵は、同じ養護学校に通う障害児たちの親として登場している。まり恵は、その養護学校の中でも「普通ではない」人物である。ムーサンと「光」が通っている養護学校でダウン症の早苗が心臓障害で死んだ際に、学校の人々からその思い出文集を出そうという声が上がった。それが持ち上がった時、まり恵は一人で反対の意見を出し、障害児の親たちの間で発言の内容が問題になったのである。

まり恵は「障害児の現実を、その全体、まっすぐに引き受けて見つめるのじゃなくセンチメンタルな涙にふやけた眼で見るのは、可哀そうな、きれいなバカ、という見方と同じで、ついには強制労働キャンプやガス室の煙というところに行きついてしまう…」 [『人生の親戚』31頁。] といいつつオコナーの話を引用している。

「僕」は、この発言が問題になったことを「妻」から聞き、まり恵の話の背景になるオコナーの思想について、次のように語っている。

31) 菅野昭正「苦痛との和解について」、注25、前掲書、10頁。

これからの課題としては、誕生前に異常がわかれば、強制的に中絶させる勢いが出て来るかもしれない。確かにそれも優しい心のやりそうなことだぜ。こういう優しさは、根源から切り離されていると、彼女はいってるのだったと思うよ。そして彼女の考える、真の優しさの根源には、神がいる。……

[『人生の親戚』31頁。]

倉木まり恵は、上のようなオコナーの思想の影響を受け、「障害」に対する自己の立場を明確にしている。障害児に対するセンチメンタルな同情を拒否しているのである。障害児に対する同情心にみちた「悲しみ」は、徹底的に拒否している。まり恵は、障害児の親として犯しやすい問題について、^{イノセント}「無垢を強調すぎる」態度を指摘しつつ次のように言っている。

オコナーの文章で、いま私がムーサンに引きよせるようにして一番よく納得できることは^{イノセント}sentimentalityについてです。ムーサンは無垢なところを多分に持っています。光さんもそうでしょう。亡くなった早苗ちゃんも、おしゃまなところはあったけれど、それもむしろ自然な範囲で、やはり無垢な子供だったわ。しかし、私たち障害者の親は、知らず知らずであっても、^{イノセント}無垢を強調すぎるのじゃないかしら？それは子供たちのせいじゃなく、もっぱら親の私たちに責任があるのよ。

[『人生の親戚』44頁。]

まり恵のこのような発言は、大江自身が障害児の父親として考えてきた難点であると思われる。大江は、ブレイクの詩篇から靈感を受けて書いた『新しい人よ

眼ざめよ』を通して、知的障害児であるイーヨーの「無垢な世界」を強調している。ところが、『人生の親戚』では、オコナーを言及しながら、障害児の現実を直視し、もっと望ましい障害児との共生を模索する苦悩が窺えるのである。まり恵の発言を通して、大江が持っている障害児の親としての責任を改めて示しているといえよう。

大江の文学世界における「悲しみ」は、大江の個人的な「悲しみ」と重ねて考えると、大江自身が障害児の父親であることと無関係ではないと思われる。大江は、「いま現在生きている社会の状況と、自分の個人生活とを重ねて、大切なものを感じられる主題を書く」³²⁾ことを続けてきたと語っている。

作品の中での障害児は大江の長男光をモデルに書かれたといわれる。また、従来の作品に出てくる障害児の親である主人公は主に男性であった。たとえば障害児の出生という作家個人の体験をモチーフとした『個人的な体験』と『空の怪物アグイー』が、その例である。一条孝夫は、ふたつの作品について、次のように述べている。

畸形の赤んぼうの生死の決定権を握っている（ようにみえる）のが父親であることからみて、ふたつの主題が大江自身をとらえていた産物であったことは明らかである。³³⁾

上で述べた「畸形の赤んぼうの生死の決定権を握っている（ようにみえる）のが父親」には、無責任な存在、自己欺瞞にみちた父親の行動様相が見られる。『個人的な体験』と『空の怪物アグイー』の中で登場している父親像は、障害児を恐怖の対象として受け入れたり、障害児の養育を避けようとしたりするものとして描かれている。しかし、『人生の親戚』では女性である倉木まり

32) 大江健三郎『「話して考える」と「書いて考える」』（集英社、2004）130頁。

33) 注2、前掲書、30頁。

恵を中心に物語が進められており、彼女は犠牲的で子供の障害をありのまま受け入れている母親として登場している。このような点が従来の作品との大きな違いである。

離婚した際、養育問題をめぐってまり恵がみせている行動は、「償い」のように表されている。障害児を引き取る過程の中で、まり恵は、次のように「償い」について言っている。

まり恵は、自分がムーサンを引きとり、御主人に道夫くんをゆだねるという仕方で、離婚を成立させた。まり恵さんが妻に話したところでは、ムーサンの誕生が、自分になんらかの「償い」をいざなうもの、と考えたというのだった。「償い」をへての喜びということも、また自分だけのものじゃないかと、そうも考えたのよ、とまり恵さんはいったということだ。「償い」のための暮らしに、夫と健常な道夫くんまで引きずりこむ必要はない、と……

[『人生の親戚』47頁。]

まり恵はムーサンの責任をひとりで担い、「償い」の課題として受け入れている。まり恵は、「償い」をへての喜びを願っていたが、彼女の不幸はそれだけで終わらなかった。その後、まり恵の家族に起った「酷たらしい事件」は彼女に言語に絶する衝撃を与えたのである。健常な道夫が身体障害を持つようになり、道夫も一緒に暮すことにしてからまもなく二人の子供は共謀して自殺する。母親としての「償い」は倉木まり恵にとって、終わらない一生の課題であったのである。

倉木まり恵という名前は「暗きマリア」を連想させる。³⁴⁾聖書の聖母マリアを連想させるのは、普通の子供とは違う息子を育てる女性の宿命と繋がっているの

34)『大江健三郎 作家自身を語る』で聞き手である尾崎真理子が「暗きマリア」を言及している。

ではないかと思われる。まり恵が生涯の最後に聖女と呼ばれたのも無関係ではないと思われる。聖母マリアは人類を救援するために、十字架を背負って自分で死を選択するメシアの母親なのであった。河合隼雄が指摘したとおり、まり恵のムーサンと道夫は、「精神と身体という十字架」という試練を背負って死を選択する。息子の「死」を前にして無力な母の嘆き声が、「暗いマリア」として再現されている。

1.3 「僕」と障害児たちの「悲しみ」

大江は、作品の中で作家自身の実際の体験を主な素材として描いてきた。これは、三島由紀夫の主張のように、「小説は、作家の想像力の所産であって、現実世界とは次元の異なる自律した言語空間、すなわち虚構なのだ」³⁵⁾という観点からみれば、批判の対象となりうると思われる。大江の「事実言及性」について、井口時男は、次のように述べている。

大江は現実（モデル）と作品との関係自体を小説化しているのであって、ここでは現実と称される世界は小説の外にあるのではなく、下位レベルとして小説のなかに取りこまれているのだ。別ないい方をすれば、この小説世界は虚構と現実という対立を含みこんで成立している。それはたしかに「私小説」のような貌をしているが、むしろ一般の虚構よりもう一段虚構の水準が高いのである。³⁶⁾

大江は、「私小説」の型式を通して、「一般の虚構よりもう一段虚構の水準が高い」小説世界を描いていると思われる。

『人生の親戚』の中で、作家Kが大江自身をモデルとしたという根拠は、直接体験した事件が引き込まれている点にある。まり恵との最初の出会いは、韓国の詩人を救出しようとするストライキの時であった。大江は、実際体験した当時のことについて、次のように述べている。

韓国の詩人金芝河の政治的な窮地を打開する、というような方向づけのハンストを銀座でやったりもしたが、とにかく実際にはなににも手につかな

35) 井口時男『危機と闘争—大江健三郎と中上健次』（作品社、2004）15頁。

36) 注35、上掲書、113頁。

かった。自分の生き方を根柢から検討し直さなきゃならないという気持ちに
駆られて、四十一歳でメキシコシティへ行った。37)

大江が述べているように実際、「国家保安法違反で金芝河の死刑を宣告さ
れた一九七四年、日本の知識人たちの‘金芝河救出委員会’の声明には、
大江の名前があげられた」38)という。大江が実際体験したハンストとメキシコの
滞在の経験が、『人生の親戚』の中で、時期的な背景として設定されてい
る。「僕」という人物が、大江自身と緊密な関係にあるのは、疑問の余地が
ない。

メキシコで滞留しながら、まり恵から二人の障害児を失う悲しみの手紙を受け
たり、離れている「光」のてんかん発作の便りを聞いて心的に痛む「僕」は、
実際大江の分身のようである。また「僕」は、障害児であるムーサンと道夫を
「光」の同伴者のように思い、彼らに関心を寄せている。障害児たちの「悲し
み」に鋭敏な感覚を持っている「僕」は、障害児たちの代弁者でもあるようにみ
られる。

障害児との共生という主題は、大江の文学世界における重要なテーマであ
る。これについて大江は「私は、知的障害を持って成長して行く子供との共生
を、自分と妻との現実の人生の中心軸としました」と語っている。また「しかも私
が作家である以上、その共生を自分の文学の主要な主題にするほかはない、と
も考えていました。」39)と障害児との共生をとらえている理由について述べてい
る。しかし『人生の親戚』は、障害児の自殺を捉えている点で見れば、「障
害児との共生」という主題からはなれているのではないかと思われる。大江は障
害児を描く時、長男光をモデルとして、「この世界の終末である現代における

37) 注9、前掲書、117頁。

38) 洪珍熙『大江健三郎論』（JNC、2005）7頁。

39) 大江健三郎『大江健三郎・再発現』（集英社、2001）28頁。

神のよう」⁴⁰⁾な無垢の世界を表わしたが、『人生の親戚』の中の障害児は苦痛の世界の被害者のように表されている。道夫はいじめられた経験の恐怖のため事故に遭い、下半身麻痺になって自殺を決心し、精神障害児であるムーサンは道夫に誘われて自殺を選択する。このような障害の問題には、ただ目に見えるその現象だけでなく、闇の世界が根を下ろしている暴力の問題とも係わっているといえよう。語り手である「僕」は、世界の様々な暴力によって現れる人生の悲惨さを直視している人物である。菅野昭正は、「僕」の世界の認識について、次のように述べている。

そもそも「僕」というこの語り手は、世界とは不条理の苛酷な暴力が荒れ狂う場所であると了解しているのだ（「暴力的なひとなぎでこちらを抹消し、事実その後も、とくに様が変わりせず続いてゆく、この世界」）。そういう世界のなかで生きるしかない人生が、どうして苦痛と切りはなせるだろうか。⁴¹⁾

「不条理の苛酷な暴力が荒れ狂う」世界の中で、「生きるしかない人生が、どうして苦痛と切りはなせるだろうか」という反問が、「僕」の苦悩の本質であるといえよう。そして、作家が持っている世界の暴力性についての苦悩は、無垢の世界を生きていく障害児たちに繋がっているのである。

障害児との共生を主題に描いている作品は、実際の長男光をモデルとしていることはよく知られている。障害を持っている光は無垢な存在で描かれている。大江はノーベル賞受賞記念講演で、作曲家である光の音楽について、このように述べている。

40) 古橋信孝「『人生の親戚』論」、注25、前掲書、110頁。

41) 菅野昭正「苦痛との和解について」、注25、前掲書、9頁。

…光の音楽は、まさに作曲家自身のイノセンスの自然な流露でした。ところがさらにかれが作曲を進めるうち、父親の私は、光の音楽に、泣き叫ぶ暗い魂の声を聞きとるほかなくなった。…かれ自身の胸に、これまで言葉によっては探りだせなかった、暗い悲しみのかたまりを発見させたのでした。42)

光は、イノセントな存在として行動するのみではなく、彼の作る音楽にもその特徴を示している。無垢さは美しさと明るさを感じさせる。しかし、無垢さの奥底には「暗い悲しみ」が内在しているのを大江は直視しているのである。そして、障害が「死の可能性」とつながっていることを話している。

この、光という子供がてんかんという病気をもっておりますために、私どもはつねにその発作に心の準備をしながら暮しているのですが、そのために、健康な人間の場合は見すごしてしまうような死の可能性を見つつ生きているとも感じています。死の可能性が、家庭の生活の場で、いつも顕在化しているということになると思います。そのように子供の死の危険をつねに意識しているということが、私にとって生命についての想像力をかきたてる契機となってきた。43)

このような障害による「死の可能性」が、『人生の親戚』では障害児の自殺という極端的な設定として描かれている。まり恵の息子ムーサンと道夫の自殺が、友達である「光」にとっても、かなり衝撃を与えた事件であったことはいまでもない。つまり、「僕」の悲しみについての認識は、障害児たちの悲しみの心の奥まで及んでいる。「僕」の悲しみは、「不条理の苛酷な暴力が荒れ狂

42) 大江健三郎「あいまいな日本の私」『あいまいな日本の私』（岩波新書、1994）16頁。

43) 大江健三郎「癒される者」、注42、上掲書、31頁。

う」世界に残された「光」と自殺した兄弟の「泣き叫ぶ暗い魂の声」を抱いていると思われる。

障害を持っている長男光の出生以後、重要なモチーフとして捉えてきた「悲しみ」の問題は、『人生の親戚』の中で、「僕」が述べている障害児の自殺問題を通して、終末と核時代の危機のような「世界の悲しみ」まで拡大されている。菅野昭正は、『人生の親戚』での終末と核時代に対する作者の意図について、次のように述べている。

終末も核もあらわな直接性においてこそ呼びだされていないが、『人生の親戚』を語る「僕」のなかにも、これまでの小説を支えてきた、歴史とかかわり、時代の鼓動に答え、宇宙に感応しようとする「僕」の開かれた性質とのつながりは、ひそかに保たれている。⁴⁴⁾

大江の文学世界を支えてきた「歴史認識」は、『人生の親戚』の「悲しみ」にみちた人生にも「ひそかに保たれている」のである。小説の冒頭で、「僕」は、広島を訪問したことを言及しつつ、「そこで会った医師たちから、また被爆者たちから、人間の巨大な悲惨を乗り越えた者らのみが発する励ましを、僕はあたえられたのである。そして初めて、嬰兒の積極的な受けとめ、という方向に進み出ることができたのだ。」[『人生の親戚』21頁。]と述べている。大江は、「ヒロシマ」の訪問を通して、「人間の巨大な悲惨を乗り越えた者らのみが発する励まし」を経験し、自身の救済の可能性を覚ったともいえよう。障害児である長男光の出生と根強いかかわりを持っている「広島」の体験のように、作品の中でみられる障害児たちの「悲しみ」と「僕」の世界の「悲しみ」とは、救済において緊密な関係にあると思われる。

44) 菅野昭正「苦痛との和解について」、注25、前掲書、6頁。

1.3.1 障害の自覚

大江の主な主題である「実存の不安」、「人間の狂気」、「政治と性」に繋がる「障害児との共生の問題」は、個人的な問題を越え、社会的な課題として描かれている。大江が文学世界の中で捉えている障害の問題は、ただ知恵遅れの人と身体障害を持っている人に限らないと思われる。『人生の親戚』の中で、障害の様相は「多重性」を持っていると思う。

大江健三郎の小説は、物語においても、描かれた個々のものにおいても、その構造は多重性を基調にしていた。…（略）二層の構造を同次元に書くことは、大江の表現の中心的なものであり、これは対比であると共に同化の現象を現していた。⁴⁵⁾

このような観点から見れば、『人生の親戚』の障害の様相を、大江の文学世界における幅広い主題としての可能性を周知しつつ、「多重性」に基づいて考察する必要があると思う。つまり、大江が描いている障害の様相を、その「二層の構造」に基づいて理解しなくては、誤解の可能性があるということである。

『人生の親戚』の中で、障害の様相は、「僕」の息子「光」とまり恵の二人の息子ムーサンと道夫を中心に表されている。この三人の障害児をめぐる出来事が、周辺人物に心理的な変化をもたらしている。身体障害児として描かれている道夫は、大江の作品の中で『人生の親戚』の他には類をみない人物である。そして道夫の兄が知恵遅れのムーサンであることは、様々な障害を持っている障害児との共生について示唆を与えようとする作家の意図による設定

45) 注6、前掲書、177頁。

であるといえよう。

しかし、兄弟が自殺で短い人生の結末をつけているのは、共生という観点に符合しない結果であるという疑問の余地がある。これまで題材とされていなかった障害児の自殺問題は、障害の自覚、つまり障害がもたらす「不安と孤独と絶望」⁴⁶⁾の問題に繋がっている。

ムーサンは「僕」の息子「光」と同じ養護学校に通う障害児である。知的障害を持っているムーサンの描写は、「光」を連想させる。友達であるムーサンと「光」は、障害の性格が似ているが、ともにクラシック音楽が好きであることも似ている。

ムーサンと「光」が友達であったため、自然にまり恵と「僕」は障害児の親として会うことができたのである。ムーサンはまり恵にとって彼女の人生を支えてくれる存在であるため、物語の展開の中で大事な役割を担っている。また、大江の作品の流れからみれば、ムーサンの役割は、これまでの障害児の有り様を代表してきた長男光のイメージとオーバーラップされている。大江の文学世界の中で、長男光の出生以来書かれるようになった「光像」は、様々な名付けによって変遷されてきた。

<ジツ＝森＝イーヨー＝光>像の変遷のプロセスは、六〇年代後半から現在まで神話学的な童児神の造形への意志だけでなく、大江の内的必然性と絡みながら、大きな牽引力として機能してきた。その出発点となるのが頭部に異常がある新生児の存在に対する父親の決着のつけ方によって差異づけられる、『空の怪物アグイー』と『個人的な体験』で

46) 注3、前掲書、16頁。

「サルトルの説く実存主義とは人間存在を次のようにとらえる哲学である。すなわち、人間が自らの生き方に自覚的であれば、自分の存在が不安と孤独と絶望のうちにあることに気づかざるを得ない。しかもこの自覚的人間が不安や孤独や絶望から逃げられようとしても試みは必ず挫折する。」

ある。47)

『人生の親戚』の中で、「<ジツ=森=イーヨー=光>像」に繋がる人物がムーサンであろう。「僕」の息子として「光」も登場するが、物語の展開は「光」よりムーサンを中心に進められている。小説の中で、「光」という人物が登場しながらも、第二の「光像」によって障害児の姿が現されているのは、これまでの小説とは違う性格といえよう。

「光」とムーサンは知的障害を持っているが、もとにクラシックに興味を持っている「光」とムーサンという二人の人物が、まるで魂が一体化された「<ジツ=森=イーヨー=光>像」のように描かれていると思われる。それは、「僕」が苦痛にみちた「光」の表情を見て、死んだムーサンの面影を浮かべるところにもよく現されている。

知能の発達が遅れた子供にも、自殺について認識があり、それは決してまとはずれのものでない、という思いが、そこで辛い記憶のひとつとなったのだ。自然に僕は—ジサツ……？と申しのべた際の光の全身の表情と、ムーサンの顔かたち、身ぶりのそなえていた個性を重ねてみるようであった。

[『人生の親戚』77頁。]

上で述べているように、ムーサンの自殺事件は、「ジサツ……？と申しのべ」ている「光」の姿を通して、偶発的な事件ではなく、すべての障害児たちにありうる問題として捉えられている。

ムーサンは、「<ジツ=森=イーヨー=光>像」といえるものの、自殺を選択した「神話学的な童児神」として描かれている。それは、以前の『洪水はわ

47) 柘植光彦「大江健三郎の<キーワード>」、注25、前掲書、128頁。

が魂に及び』 『新しい人よ眼ざめよ』 などの場合とは確然と相違する点である。古橋信孝は『人生の親戚』について次のように述べている。

これまでの小説で、大江は「光」を、この世界の終末である現代における神のようにえがいてきた。無垢でやさしく、そして毅然としている。しかし神を世話する者はたいへんな苦勞を負っているはずだ。『人生の親戚』はその問題を扱っている。48)

苦勞を負わせてくれる障害児の姿は、「世界の終末である現代」の状況で見れば、より現実的で当然なことかもしれない。神話的世界から現実世界へ帰還した「童児神」を見せていると思われる。

兄であるムーサンを知恵遅れとして設定し、弟である道夫を車椅子の身体障害児として描いているのは、精神障害と身体障害がもたらす個々の痛みも表わそうとする作家の意図によると思われる。大江は、知恵遅れの息子との暮らしの中で体験した「障害の受容」を、身体障害の場合に比較して、次のように述べている。

障害のある息子と自分との、あるいは自分の家庭全体のリハビリテーションの過程ということはずっと考えておりましたね。身体障害の場合は個人のリハビリテーションとして、混乱期から障害の受容ということに展開していきますけど、僕たち知恵遅れの子供を持ったというものは、…一緒に混乱してしまうことがあるんです。49)

48) 古橋信孝 「『人生の親戚』論—私小説の方法と世界の終末・救済」、注25、前掲書、110頁。

49) 大江健三郎、河合隼雄 「生と死の境界、そして文学」 『文学界』1989年8月号、179頁。

知恵遅れの場合、「家庭全体のリハビリテーションの過程」を経て「障害の受容」が行われるということである。逆に、身体障害児におけるリハビリテーションの過程は、個人的に混乱期を過ごすようになり、当該の障害児は知恵遅れの子供の方より疎外を感じやすいのである。身体障害の道夫が自ら自分の障害を受容するまで、離婚した両親を含めて誰も役に立たなかったのだろう。誰かが励ましてあげるために足の具合を聞いたりすると、道夫は「憎しみのあらわな反応」を示したのである。

身体の不自由の悲しみは、精神障害を持っているムーサンだけが、慰めてあげることができたかもしれない。障害の性格こそ相違するが、障害を持って生きていく人生の同伴者として、底流している「悲しみ」を共有するもっとも近い友人として、またお互いに足りない能力を埋めてくれる存在として描かれている。

このように、お互いに異なる障害を持っている兄弟という人物の設定は、障害の多重性を捉えるための試みであると思われる。兄弟がともに自殺する場面の描写では、障害の相違による行動の相違も表わされ、二人の障害児を登場させた作家の意図が窺われる。

身体障害の悲しみは、道夫の心理的な変化を通して、詳しく描かれている。まり恵の離婚している夫サッチャンは、手紙で事故が起った直後の道夫の様子を、次のように述べている。

はじめのうち道夫は、下半身麻痺の障害を、生きての間ずっと担って行かねばならないことに、無関心のように感じられたのです。かつての、利発者らしい滑稽な言動で、周りの者の気持を引きたてる、ということこそなかったのですが、自分の下半身が麻痺して、そのためにいろいろ新しく学んだり練習したりしなければならないことについて、舞台の上で演じられる自分を見ている、とでもいう態度なのでした。妙に穏やかに静

かにして、私はもとより、まり恵とムーサンが見舞いにくても、感情を示すことはなかったのです。 [『人生の親戚』53頁。]

最初、道夫は自分に起った事故と障害について、「舞台の上で演じられる自分を見ている」ように無関心な態度をみせる。不条理な出来事に面して「妙に穏やかに静かにして」いる道夫の姿は、「悲しみ」の感情を抑制しているようにもみられる。

まもなく、道夫は、リハビリテーションの専門家の指導を拒否したり自分の障害を否定したりするようになる。「自分の麻痺は一時的なもので、ある朝、眼がさめたら立って歩いているはずであり、車椅子の技術の熟達など意味がない」 [『人生の親戚』54頁。] といいはりはじめたのである。道夫のこのような障害を否定する行動は、だんだん暴力性を帯びるようになる。

その暴力性は事故の原因とも関係があるようである。道夫の交通事故は、道夫と同じバスで通学するある中学生からのいじめを避けようと急にバスを降りたのが原因であったのである。結局、いじめられた経験は、道夫に身体的障害のみではなく、精神的障害をも持たせていた。

人間社会に繰り広げられる暴力は、障害の結果として現れているものであることを示唆しているのではないか。人間の暴力が小さな集団から始まり、戦争という世界の暴力にまで広がっていくのを、大江は数多くの作品で描いてきた。それは、彼が戦後作家と呼ばれることや、自身の経験とも無縁ではないと思われる。少年時代に彼が、出郷する切っ掛けになった経験については、次のように伝えられている。

入学一年後、大江は内子高等学校から名門の県立松山東高等学校に転じている。転校の理由は明らかでないが、周囲の同級生たちが

あまりにもく文学におぼれている」という軽薄な印象が、転校の決意する直接の動機となったと自記している。また、毎朝登校する彼を待ち、校舎の裏につれこんでは殴りかかる上級生がいて、このいわれない暴力が毎日つづくのがいやであったという事情もあるらしい。50)

上で述べられているような大江の少年時代の経験は、作品に現れる暴力と決して無関係ではないと思われる。「毎朝登校する彼を待ち、校舎の裏につれこんでは殴りかかる上級生がいて、このいわれない暴力が毎日つづくのがいやであった」という状況は、『人生の親戚』における道夫のそれと一致している。

作品の中で暴力による道夫の事故は、身体障害を持たせた。道夫は暴力の被害者であり、またその暴力は自殺という別の暴力を生むのである。道夫はその暴力を外部に解消できなくて自分自身に発散するようになり、結局自殺を選択する。健全な子供から身体障害児になった道夫の心的変化は、知恵遅れのムーサンの考えにまで影響を与えた。道夫とムーサンの障害の様相は、お互いに違っても、二人が共感する「悲しみ」は通じ合っていた。お互いに足りないものを支えようとしたが、その哀絶な兄弟愛が結局自殺につながっている。これは、道夫の実存することに対する不安な心理とそれに共感したムーサンの選択が理由であると描かれている。道夫とムーサンの心理的な変化は、自身の身体に起っている現象も原因になっているが、他人による刺激も原因として働いている。

まり恵はまた、週一回受けているリハビリテーションの訓練で、道夫が努力をしないと、きびしく咎められたことを話しました。若い指導員が、励ましにみちた態度ではあるが、きみの障害は一生の問題なのだから、勇

50) 注2、前掲書、5頁。

気を出して受け入れて、対応しなければならないと叱った、というのでした。通夫は反撥するというよりショックを受けて、病院の帰り道ずっとふさぎこむ様子だったと……

[『人生の親戚』54頁。]

事故の後、暴れた道夫は若い指導員の話を通して障害が「一生の問題」であるのに気づき、ショックを受けて沈黙したのである。ここで話している人物は道夫の父親であるサッチャンであるが、若い指導員について何らかの恨みが感じられる。若い指導員のような姿勢は、障害児の父親である大江が実際経験したはずである。語り手である「僕」の話は次のようである。

病院で、はじめ知恵遅れの子供は愛想良い応対を受ける。ところが、時には自分で押えることのできない怯えから、処置に抵抗を始める。健康なハイ・ティーンの体力を構えているのでもある。そのうち医師・看護婦の態度が変わる。障害児自身は気にとめる余裕がないが、脇で心を痛めている母親に、それは辛いことだ。

[『人生の親戚』76頁。]

障害児を可愛そうに感じて愛想良い応対をする人々も、考えどおりにできなければ態度を変えてしまうのである。このような健常な大人たちの行動の変化は、障害児に障害を自覚させる切っ掛けになるとみられる。健常な大人たちの世界は、無垢の障害児たちと克明に分離される冷酷な世界でもある。傷つきやすい障害児に対する大人たちの冷酷さは無垢の魂を失わせ、「不安と孤独と絶望」を抱かせる原因になるのを大江は、直視しているともみられる。

以上のような「障害の自覚」という観点は、これまでの作品の中でみられなかった障害児たちの「悲しみ」の問題を再考する装置になっている。大江が語ろうにした障害による「悲しみ」は、「僕」の眼に映った世界の暴力性と緊密な関係にあったのである。

1.3.2 障害児の自殺

大江の作品の中で、自殺を捉えた作品が少なくないが、障害児の自殺は『人生の親戚』以前には類を見ない題材である。福田和也は、大江の文学世界における素材としての自殺について、次のように述べている。

近代日本文学を貫くもっとも大きなモチーフは、自殺である。夏目漱石から村上春樹まで、小説家たちは自殺を書き続け、北村透谷から江藤淳まで文学者たちは自殺し続けた。…（略）大江氏は初期から、最近に至るまで、自殺をその作品の重要なモチーフとしてきたのである。⁵¹⁾

自殺は、「近代日本文学を貫くもっとも大きなモチーフ」であり、「大江氏は初期から、最近に至るまで、自殺をその作品の重要なモチーフとしてきた」という。では『人生の親戚』の中で兄弟の自殺は、どのような文学的な必然性を持っているのかが重要な問題になる。

まず、大江文学における自殺の様相を検討する必要がある。大江の最初の作品といわれる『火山』で従妹の自殺をとらえながら「政治組織内部の人間疎外状況」⁵²⁾を描いている。その後、『孤独な青年の休暇』⁵³⁾の疎外された青年「私」の自殺、実際政治事件を背景にした『政治少年死す』⁵⁴⁾の「おれ」の自殺、『性的人間』⁵⁵⁾の「J」の妻の自殺、『日常生活の冒険』⁵⁶⁾の「ぼく」の友の自殺、『万延元年のフットボール』⁵⁷⁾の近親相姦の

51) 福田和也「大江健三郎と自殺者たち」『文学界』1999年9月号、146頁。

52) 篠原茂『大江健三郎文学辞典』（森田出版、1998）12頁。

53) 『新潮』1960年4月号

54) 『文学界』1961年2月号

55) 『新潮』1963年5月号

関係にあった女性の自殺、『同時代ゲーム』58)の「僕」の妹の自殺、『キルプの軍団』59)のドキュメンタリー映画監督の自殺などが見られる。

多くの作品の中で自殺の事件を描いているが、障害のために自殺を選択した人物は類をみない。『万延元年のフットボール』の中で、自殺した女性は白痴であるが、自殺の理由が障害そのものではない。『人生の親戚』の中で、障害の問題を浮かび上がらせたのは「兄弟の自殺」であろう。沈潜していた障害の苦痛が「自殺」によって水面の上に浮かび上がるようになるのである。まり恵の息子である道夫とムーサンは、まったく予想しなかった自殺を選択する。兄弟の自殺の光景について、次のように描写している。

波音が高いのですが、車椅子に乗っている少年の方が、叫び声に反応しました。かれはじっと伏せていた顔をあげ、呼びかけて来る声に耳をかたむけるようにしました。車椅子自体、ガクリととまった。乗っている方で車椅子にブレーキをかけたのが、よくわかったそうです。

ところが、それまで車椅子を押して来て、背もたせのパイプに胸をうちつけるようにしてとまった少年は、いかにも不器用にではあるが、懸命に、車椅子を前へ押し出そうと苦心する様子でした。(略)……耳を突っこみ、そのまま前進して、フワリと空中に片足を踏み出し、落下して行ったのです。

[『人生の親戚』62頁。]

幼い二人の障害児が自ら死を選択する場面である。一人は車椅子に座っている身体障害児であり、また一人は知的障害児である。二人は彼らを見ていた

56) 『文学界』1963年2月号～1964年2月号

57) 『群像』1967年1月～7月号

58) 新潮社、1979

59) 岩波書店、1988

人々に、崖の前で絶望を抱いて自殺を準備しているように見られた。その時、人々の叫び声に反応したのは、身体障害児である道夫である。他人の叫び声を聞いた瞬間、自分の死がいか「悲しみ」を与えることなのかについて気づいたようである。その直後、弟である道夫は車椅子にブレーキをかけ、崖の前で躊躇していたのである。

しかし、知恵遅れのムーサンは、いきなり耳を突っこみ、崖で跳び落ちてしまう。それに衝撃を受けた道夫は、すぐ車椅子を動かして自ら落下してしまう。その時、現場で写真を取っていた人により、耳を突っこんでいるムーサンの姿が「ワルシャワのゲッターから強制連行されるユダヤ人たちのなかの、両手をあげている愛らしい子供の写真」 [『人生の親戚』63頁。] を思い出させるものであったと伝えられている。

ムーサンと道夫の自殺は、障害を持っている兄弟が共謀した自殺という点で衝撃を与える。障害児が自ら自殺を選択するのは、どのような意味を持っているのかが問題になる。二人の息子の自殺のため、父親であるサッチャンはほぼ回復不可能なアルコール中毒者になり、母親であるまり恵は絶望を抱き自殺もできない悲しみの中で生きて行くことになる。

自殺問題は、文学のみではなく、現代社会の重大な問題である。自殺を招来する行為を自殺的行動と呼び、ムーサンと道夫の行動にも現れている。多田治夫によると、自殺的行動は次のように三種類の行動レベルで区別される。

- ① 希死念慮（思考レベルの自殺）：本人は「心身の苦痛を断つためには、死ぬしか方法がない」と判断している。
- ② 自殺威嚇（言語レベルの自殺）：「死んでやる」「自殺してやる」などと言って、他者に脅威を与える。“他者の反応を確かめる”意図がこめられており、歪んだ形の「助けを求める叫び」といえる。

- ③ 自殺の素振り（行動レベルの自殺）：縄に首をかける素振り、薬・刃物を隠し持つ、部屋を整理し貴重品を人に与えるなど（自殺の緊急度は中程度）⁶⁰⁾

道夫は事故の後、下半身麻痺という苦難を持って生きて行かねばならぬことに絶望を感じ、「思考レベルの自殺」の行動はたびたび見せているが、他の二種類の行動はみせない。一般的な自殺行動とは言えない設定である。自殺前の道夫とムーサンの行動には、彼らの自殺を予想することのできる何の端緒もない。事故の後、道夫の性格が乱暴に変わったものの、傷つきやすい子供であるから、大人の世界の暴力性とは違う性格といえよう。自殺の理由をめぐって悩んでいたまり恵は、知的能力を持っている道夫が、無垢の知恵遅れのムーサンに自殺を誘ったのではないかと考える。

しかし、道夫に自殺を誘われたとしても、ムーサンは「死」について普通の子供よりも非常に恐怖を持っていたから、自ら死を選択したというのはまり恵にとって理解不能の「ミステリー」であった。道夫とムーサンが、ただ障害による個人的な「悲しみ」を振り捨てるために死を選択したという推理は難しくなる。

まり恵は結局、この悲惨な「ミステリー」が「現世の悲惨、苦しみ、不快」のない「天国」を夢見る子供の願いではないかと気づいたのである。

そのような「天国」は、道夫くんの言葉どおりのものとして、実在するのではないか？道夫くん自身は、つねに自分の言葉を確認している、というのではなかったかも知れない。しかし、ムーサンの無垢の心に、その言葉はしみとおりに、他の大人たちの言葉には耳に指を突っこんで、崖から跳び降りさせるほどだった。それは道夫くんの意図から独立して、この言葉

60) 多田治夫「大学生の自殺について」『工学教育研究』NO.15(20080601)、金沢工業大学、95頁。

に真実がふくまれていたからではないか？ [『人生の親戚』147頁。]

まり恵にとって、二人の息子が苦痛の中で、終末に向かう絶望を抱くまま死んで行ったとすれば、それこそ人生最大の不幸であろう。しかし、兄弟が死を迎える瞬間、夢見ていた「天国」を心に抱いたまま「天国」という「言葉の真実」を信じいたのではないかと、まり恵はそのように考えながら自身を慰めている。

大江健三郎の描く主人公は、ほとんどが暴力の被害者だといってもいいくらいだ。だからこそ大江健三郎は“ノアの箱船”を作って、彼ら、弱い人間を乗せて、新しい世界へ出発しようとする。⁶¹⁾

暴力の被害者として描かれた道夫とムーサンが夢見た“ノアの箱船”は「天国」であった。自殺そのものを選択することではなく、「新しい世界」へと出発するために自殺を選択したのではないかと思われる。

まり恵は、自殺を選択するかわりに「新しい世界」への道として、子供たちの短い人生の「記憶」を持って生きて行くことを選択した。大江は、『人生の親戚』の主人公に最大の不幸を設定し、人物たちの多様な行動様相を通じて人生の救援の方法を多角的に示しているのではないか。

自殺の場面で、耳を突っこんでいるムーサンの姿が、「ワルシャワのゲッター」から強制連行されるユダヤ人たちのなかの、両手をあげている愛らしい子供の「写真」を思い出させるものとして描かれている。障害児の姿が歴史的な「悲しみ」を含んで、現実世界の「暴力の被害者」として表されている。

大江は、障害児の自殺を通して、これまでの障害をテーマとしていた作品とは違う結末を設定し、「死の可能性」を積極的に捉えて救済の問題を提示しよう

61) 川本三朗「『治療搭』へー恐怖のフォークロア」、注25、前掲書、14頁。

としたのではないかと考えられる。

2. 「救済」の問題

大江にとって、人間の「救済」の問題が小説の中で本格的に表出される切っ掛けになったのは、一九六三年長男光の出生以後であるとみられる。「障害をもつ子供との共生」という大江的テーマをもって書かれた作品として、まず『個人的な体験』が挙げられる。『個人的な体験』のテーマについて、江藤淳との対談「現代の文学者と社会」（一九六五）で、大江は次のように述べている。

「個人的な体験」でぼくが書いたのは、結局一人の青年の異常な赤ん坊が生まれる、それにどう対処しようか、逃げ出そうか、それとも逃げ出そうことをしないで正面から引き受けようかということを考える。あれは論文じゃなくて小説ですから、いろいろな点で具体的に青年が右に揺れたり左に揺れたりするその過程が最も必要なわけで、青年がついに赤ん坊を引き受けて育ててゆこうという態度をきめた瞬間にじつは小説は終わっているとぼくは考える。⁶²⁾

大江は、『個人的な体験』で障害児の出生という不条理な運命を「正面から引き受ける」青年の回心の過程を描いている。『個人的な体験』の主人公である「鳥」^{パート}が見せている「正面から引き受ける」態度には、その過程の「危機と闘争」という側面で、『人生の親戚』のまり恵と類似点が見られる。大江が述べている「右に揺れたり左に揺れたりするその過程」は、作品の中で主人公の危機的な様相を見せるものである。

大江の文学世界は、主人公が逢着した問題に対して、積極的な克服の姿

62) 注3、前掲書、103頁。 再引用

勢を肯定的に描いてきたと思われる。大江の処女作である『死者の奢り』（一九五七）の「後記」で約束していた「人間の積極的、肯定的側面をえがく」⁶³⁾という課題が、その後、長い間続けてきた大江の創作の中で、実現されているのではないかとと思われる。

大江は、作家として危機の時期であった長男光の誕生以後の時期を回想する対談で、「光」という名前について次のように述べている。

一九六三年六月に光は生まれました。…その頃、私はシモーヌ・ヴェイユを読んでいました。…その中に寓話の一つ載っていた。イヌイットの寓話ですが、世界がまだ始まったばかりの頃、地上にはカラスは、「この世に光があったら、どんなに餌を拾うのが易しいだろう」と思う。そう思った瞬間に世界に光が満ち満ちた、と。それが本当に望む、期待する、願うということだし、希望を持つということで、人間が本当にそれを持てば、叶えられるとヴェイユは書いていました。僕には信仰がないけれど、神が存在するなら、そういう希望、真っ暗闇のなかでの光に向けての希望と関わっているんじゃないか？そんなことを子供が生まれてからずっと考えていました。⁶⁴⁾

大江にとって、障害児の長男が生まれてからずっと生き方の支えになったのは、「真っ暗闇のなかでの光に向けての希望」であったとみられる。大江は、「シモーヌ・ヴェイユ」を読んでから希望の志を「光」という名前に込めていた。実際作家は、文学における「救済」の可能性を体験しているように見える。

「自己救済の完結」⁶⁵⁾と評価される『新しい人よ眼ざめよ』は、ブレイクの

63) 注3、前掲書、102頁。再引用

64) 注9、前掲書、84頁。

『無垢の歌、経験の歌』に靈感を受けて構想されたもので、ブレイクを愛読する父親の姿が描かれている。また、聖書を直接引用したり、比喩的に書いた作品も少なくないあり、宗教的なメタファーがよく現されている。「その題名自体が旧約ヨナ書や詩篇（六十九篇）、また創世記（六章～九章）などにかかわる」⁶⁶⁾ 『洪水はわが魂に及び』（一九七三）、創世記のアブラハムとこの子イサクの物語を引用した『キルプの軍団』（一九八八）、「事相としての『ヨブ記』的主題へと深められる」⁶⁷⁾ 『人生の親戚』（一九八九）などがある。

「『ヨブ記』⁶⁸⁾的主題」へと深められる『人生の親戚』の中では、悲しみにみちた人生の「救済」の方法が多角的に求められている。知られない「宇宙の意志」によって弱い人間が思いがけない苦難の壁にぶつかり、そのなかで受難を克服しようとする人間の意志を描く構造である。究極的に「障害児の自殺や不条理な出来事によって心身の分裂を来した主人公の救済の課題」⁶⁹⁾を中心にとらえているといえよう。

「救済」の問題が、『人生の親戚』の中で、重要なモチーフになっているのは疑問の余地がない。主人公のまり恵は、「酷たらしい事件」を経験した後、宗教的な認識により、「宇宙の意志」に対する根本的な問いを繰り返す。彼女は「危機と闘争」を経て聖女として呼ばれることになり、「救済の可能性」を示唆している。このようなまり恵の人生の物語を通して「救済の可能性」がどのように提示されたのかについては、その「救済」をめぐる「危機と闘争」の過程を分析する必要があるといえよう。

65) クラウプロトックウォラック『大江健三郎論—「狂気」と「救済」を軸として』（専修大学出版、2007）

66) 佐藤泰正「大江健三郎—その宗教性を軸として」、注25、前掲書、29頁。

67) 注66、上掲書、35頁。

68) 広辞苑：旧約聖書中の一書。ヨブ（Job）という敬虔な篤信者の苦悩について記す。

69) 注2、前掲書、51頁。

2.1 自己救済の危機

大江は自分の家庭における障害児の誕生という経験を踏まえ、『個人的体験』『万延元年のフットボール』『洪水がわが魂に及び』『ピンチランナー調書』等の長編小説で、「障害をもっている子供との共生」を土台にして現代社会の危機的状況を追求してきた。⁷⁰⁾

大江は、危機的状況の中で、救済が求められる主人公の姿について、「右に揺れたり左に揺れたりするその過程」を繰り返し、その危機的な問題自体を引き受ける人物として描いている。例えば、障害児の出生という問題に直面した『個人的な体験』の「鳥」のように、心理的不安にみちたひどい揺れを見せている。

『人生の親戚』の中で、子供たちの死を経験したまり恵も、そのような過程を繰り返し、自己救済の危機的な様相が描かれている。大江は救済の問題を、単に主人公たちのハッピーエンドの結末として、捉えているのではないと思われる。むしろ、危険な状況の中で救済を求めようとする作家の意志が窺えるのである。エッセイ『危険な感覚』（一九六三）の中で、大江は次のように述べたという。

大江の「危険な感覚」（一九六三）ではこう書かれている。「ぼくという作家にとっていちばん大切な、そして最も基本的な態度とは、それは危険の感覚をもちつづけることです」。「危険の感覚をもちつづける」とは「実存の状況」に「鋭敏な眼をひらき」つづけるということである。⁷¹⁾

70) 注3、前掲書、157頁。

71) 注3、前掲書、65頁。

大江は、「危険な感覚」に鋭敏な作家であるといえよう。「危険の感覚をもちつづける」作家意識は、「危険の感覚にみちた観察力」に繋がっている。そのような作家の観察力は、主人公の心理的な内面をさぐる描写にも現されている。

倉木まり恵は、二人の息子を失った後、離婚したサッチャンに、兄弟の親としての危機的な状況について次のように語っている。

サッチャン、私たちの人生は失敗だったね。いいものはもうなにも残っていないね。これからまた、めずらしいことや美しいことにめぐりあったとしても、一緒に楽しむムーサンや、道夫くんはいないと感じて、逆に落込むはずだものね。

[『人生の親戚』71頁。]

二人の息子の不在は、残っている人生を否定する様相で描かれている。この後、サッチャンは回復の不可能なアルコール中毒者になり、間接的に社会の不適應者の姿を見せている。まり恵の場合は、それと逆であった。彼女を保護しようとする三人の若者たちがあり、彼らは「僕」にとって、明るく活気にみちた「新世代」のイメージとして、描かれている。彼らは、「誰も彼女を独占することなどは思わないで、愛慕しているというか敬愛しているというか、そうした状態」を持っていながら、「自分らの未来を愛している」若者たちであった。逆境に耐えながらも＜未来を愛し＞て情熱的に生きる若者たちの姿は、『人生の親戚』以後の大江作品—『燃えあがる縁の木』三部作と『宙返り』—に至って、結実するモチーフである。⁷²⁾

「新世代」の若者たちは、まり恵に起った不幸な事件が持たせた内面の破壊の現実の中で、彼女自らを再建する可能性があるのかについて、次のように

72) 伊藤久美子「大江健三郎『人生の親戚』の語り手」『文学研究』2007年4月号、35頁。

述べている。

つまり、あの人が内面でどんな破壊をこらむっているか、それがよくわかっていないわけです。もっとわかりにくいのは、あんなにひどいことを経験した後で、どのように生活を再建できるものか、ということですね。生活というより、もっと基本的に、自分を再建する、ということが出来るか……

[『人生の親戚』102頁。]

このように若者たちは、まり恵の人生が再建できない危険に陥っている状況を「危険な感覚」の観察者の眼で見ているのである。

若者たちがフィリッピンの演劇運動グループを招き、まり恵の経験した不幸な物語が上演された。それは、まり恵にとって「内面の破壊」と直面する残酷な過程であったのである。演劇の内容は、次のようである。

車椅子に乗った障害児と、それを押す知恵遅れの兄弟は、なんとか振り切ってジャングルへ姿を消す。そこへ表われたアングル・サム扮して神父と、村人の問答。自殺は神の意志に反することであるから、協力して制止しよう、と村人は持ちかける。もとより神父は賛成。村人は条件を出す。自分は教会で暮しを保証されている自分ではないから、ジャングルに分け入る労働分の報酬は当然。救けたふたりは教会がひきとり、自分には車椅子をくれ、という。しかし、教会にその予算がない…

[『人生の親戚』123頁。]

このようなグロテスクな演劇としてまり恵の出来事を再現したのは、彼女の「内面の破壊」を治療する目的であったものの、辛い記憶がよみがえるようになる。演劇の中で、自殺した二人は「天国に召された」といっているが、まり恵は、

自殺光景を目撃したような衝撃を受ける。

この劇団の名は、神の存在を示したような「宇宙の意志」である（この作品で、「神」＝「宇宙の意志」として呼んでいる）。大江が神と宗教について直接とらえているのは、時代像の反映とも関わっているためであると思われる。大江にとって現代社会の急速な転換と核時代の危機は、救済の問題に繋がっていると考えられる。大江は『人生の親戚』が書かれた八〇年代後半の状況を、「祈りと文学」という主題の対談で、次のように述べている。

社会の大きい転換のなかで手も足も出ない。そうした気持ちがそれまでに増して強かった時期です。一九八〇年代後半は。そして読んでいるのはブレイクからダンテ、また現代の仕事ではノースロップ・フライらの著作で祈りということを考えることが多かった。…（略）祈りの言葉というものを…神様はどこにいるかわからないけれど、とにかく自分の心から、体から湧いてくる、この祈りのような言葉と自分の文学とがどのように結びついてゆくものなのか、それが知りたい、としきりに考えていた。⁷³⁾

大江は、神の存在については、否定も肯定もしないが、祈りについては「自分の文学とがどのように結びついてゆくものなのか」という疑問を持ち続けてきたのである。そして、その苦悩がまり恵の姿と、一致する面も窺える。上で述べている「社会の大きい転換」が起っていた一九八〇年代後の大江の作品群は、互に類似点が見られる。『M/Tと森のフシギの物語』⁷⁴⁾『懐かしい年への手紙』⁷⁵⁾『キルプ軍団』『人生の親戚』など、一九八〇年代の作品における特徴について川本三朗は、次のように述べている。

73) 注9、前掲書、213頁。

74) 岩波書店、1896

75) 講談社、1987

近年の大江健三郎の世界は従来にまして一段と想像力豊かな、スケールの大きい物語へと広がっている。大仰を承知でいえばそれは宇宙的規模の物語である。大江健三郎はまるで地球の危機を知ったノアが箱船を作るように、大きな物語を作ろうとしている。76)

八〇年代大江作品にみられる「宇宙的規模の物語」の傾向は、宗教的メタファーと密接な関係を持つようになる。川本三朗は、大江の危機的な観察力を、ノアが地球の危機を知ったのに比喻し、ノアが作った「救済の箱船」を大江の物語に比喻しているのである。

『人生の親戚』でも、救済のための「ノアの箱船」のように、宗教的なイメージが色濃く現われている点が、注目される。まり恵は、自分に起った不幸な「ミステリー」を宗教的接近を通じて、解決しようとしたのである。それで入ったところが「集会所」であった。「集会所」という場所の設定は、自己救済の危機的な状況を表わすものとみられる。まり恵は、「集会所」の指導者であるテューター・小父さんとの論争について次のように語っている。

「集会所」で、この間、テューター・小父さんと私に論争があったのね。それが尾を引いて、私はなんだか行きづまるふうだったの。テューター・小父さんがめずらしくキリスト教に直接ふれた「説教」をして、「感知しえるものと理解しえるもの」という主題を選んだのね。sensibleとintelligibleということでしょう？かれによれば、この世界の感知しえるものはすべて、理解しえるものなのね。なぜなら、はじめに言葉があつて、つロブスまり理解しえるものがあつて、それが世界の事物になった、つまり感知しえ

76) 注61、前掲書、12頁。

るものとなったのだから。

[『人生の親戚』170頁。]

まり恵は、「感知しえるもの」が「理解しえるもの」だとは考えていない。「罪」のない無垢な障害児たちの自殺は、その出来事については感知しているが、理解できない「ミステリー」である。神に関する認識も「感知しえるもの」であるが、「理解しえるもの」として受け入れないまり恵の頑固な意志は、小説の最後まで続いている。これは、大江の宗教観と類似点がある。大江の宗教観が窺える「信仰を持たない者の祈り」についての解説の中で、次のように述べている。

大江はかつて『懐かしい年への手紙』の発表直後、「信仰を持たない者の祈り」（一九八七年十月）という講演をおこない、大きな反響をよんだのであるが、信仰を持つ人たちの側からの反応にはかなり神経を使うようになった。この小説で「祈り」を「集中」という言葉で表現しながら、特定の宗教的立場を離れた「祈り」の可能性を追求している…77)

一九八七年十月行われた「信仰を持たない者の祈り」という講演で、「集中」という言葉は、まり恵が入った「集会所」の中で行われる「瞑想」と同様な概念であるといえよう。『人生の親戚』の中で、まり恵は「信仰を持たない者」として描かれている。上で述べているような「集会所」という宗教的な色彩の強い場所を設定し、そのなかで、「瞑想」に心酔しているまり恵を「信仰を持たない者」として描いているのは、何らかの作家の意図が窺えるところである。「信仰を持たない者の祈り」とは、人が自分の力ではどうしようもない状況

77) 注52、前掲書、407頁。

に直面した時に、何に対してなのかわからないまま祈ってしまった・祈らざるをえなかった、そういう状態を示しているのである。まり恵は、イエーツの詩を通して、イエスキリストの「再臨」に深い印象を受けているが、それが「信仰」ではないと述べている。

大江は、まり恵の「悲しみ」にみちた人生の中で、宗教的イメージを捉えながら、「信仰を持たない者」の救済の問題に接近しているのであるといえよう。

私たち宗教を持たない人間にも祈るということはある。「生命の春」のために「核の冬」を拒むという願い、あるいは祈りは、もちろんキリスト教徒の方によって持たれているに違いない。… (略) そういう信仰を持っている人たちの共同に私たち信仰を持っていない人間が加わっていきということが大切だと思うのです。それが「核の冬」をふせいで、「生命の春」ということを希望するための、いちばん根本的な行動じゃないかと思っています。78)

上で述べている「生命の春」への願いは、大江が究極的に求めようとする「祈り」であるといえよう。「信仰を持たない者」として描かれているまり恵は、「集会所」の宗教指導者であるテューター・小父さんが死んだ際に、危機的状況の中で、「生命の春」への願いを示す。「集会所」に属している娘たちが、テューター・小父さんの死を美化して、「あの人の魂は天国へ行った・その入口で私たちの魂の案内をしようと待っている」 [『人生の親戚』190頁。] といはっている状況であったのである。このような「集団自殺」の危機的な状況の中で、まり恵は、「説教」を通して集団の危機を乗り越える。「集会所」の娘たちによって、まり恵が新しい指導者になってくれることが期待されていたが、まり

78) 注6、前掲書、240頁。再引用

恵は、解散することを勧め、それが「本当の回心」に到りうるのかもしれないと説得する。

まり恵が自己救済のために入った「集会所」での生活は、集団の内部的な問題にぶつかり、危機的な状況に遭ったが、まり恵によって集団の女性たちが救済される様相を見せている。「ノアの箱船」のように救済のイメージを持っている「集会所」という危機的な場所を設定し、まり恵を通して「信仰を持たない者」の救済の問題を投影したといえよう。これは、救済の問題における危機的な状況を設定して、それを乗り越える主人公を描こうとする大江の試みであったと思われる。

2.2 自己救済の闘争

大江が、「悲しみ」の問題を、ただ特定の個人的な出来事の問題として捉えなかったのは先述した。『人生の親戚』で表わされている障害児の自殺という事件は、日常性から離れていると思われるが、まり恵が救済を求める方法をめぐる様相も現実から離れているように見える。井口時男は、大江の小説の中で、表わされている個別の出来事の意味について、次のように述べている。

…個別の出来事それ自体に意味を探ってはならない。しかしそれは意味を排除したわけではなく、むしろ、暗黙に個々の特殊な出来事が「それと知らずに」普遍的な意味をになっていることを前提している。⁷⁹⁾

このように、「個別の出来事」は、「普遍的な意味」を持つようになっているのである。「『人生の親戚』はオーバーな小説である」⁸⁰⁾という川本三郎の指摘のとおり、まり恵の「個々の特殊な出来事」は、現実的に受け入れがたいところがある。しかし、「個々の特殊な出来事」を通して、救済における「普遍的な意味」を考えるべきだと思われる。

「個々の特殊な出来事」による自己救済の闘争が持つ「普遍的な意味」については、二つの点に分けて考えることができる。一つは、空間の展開という点であり、もう一つは、時間に関する認識である。まり恵が人生の晩年に救済を求める過程は、空間を中心に描かれている。次は、空間をめぐる展開が、救済の問題とどのように関連しているのかについて考えてみたい。そして、時間認識は大江の小説の中で、「死と再生」にかかわっているが、救済の問題における「死と再生」については、「記憶」という装置と「回心」という点で考え

79) 注35、前掲書、190頁。

80) 注7、前掲書、230頁。

てみたいと思う。

2.2.1 空間をめぐる

大江の初期作品から、空間の設定は重要なモチーフになってきたと思われる。「E・A・コーエン『強制受容所における人間行動』によって、今世紀最大の人類規模の狂気について決定的に洗礼を受けていた」⁸¹⁾といわれるが、「強制受容所」のような空間として設定される「監禁状態」を初期作品の中で頻繁に描くようになったことから分かる。江藤淳は、大江文学に表わされている「監禁状態」について、次のように述べている。

ここでいう「監禁状態」とは、時代的にいえば一種の閉鎖状態であり、存在論的にいえば「社会的定義」の仮構をみぬいたものの一種の断絶感である。この二つの二重写しになっているところに、いわば大江健三郎の作品の独創性がある。⁸²⁾

「監禁状態」を通して「社会的定義の仮構をみぬいた」断絶感を描いているのである。「監禁状態」は、『人生の親戚』の中で、宗教集団である「集会所」として描かれていると思われる。強制されている場所ではないが、現実世界に離れている「閉鎖状態」であるといえよう。「集会所」の宗教指導者の死を理由で、「集団自殺」を共謀する人々は、大江文学世界の中で、典型的な「閉鎖状態」の有り様を表わしていると思われる。

また、大江が初期作品からこだわっている場所が「谷間の村」である。

81) 注2、前掲書、34頁。

82) 注3、前掲書、51頁。

「『万延元年のフットボール』で歴史的に描かれている〈谷間の村〉は『同時代ゲーム』で時間と空間のくびきを離れることより〈村＝国家＝小宇宙〉という神話的なイメージを与えられる」⁸³⁾という。「谷間の村」のような場所は、「母胎的空間」のイメージを持っていながら、核時代の「核シェルター」としても描かれている。

そして、大江の文学世界の中で、一つのキーワードとして登場している場所は、「広島」である。「六三年六月に障害をもつた長男が生まれ、その年の夏に広島を訪れた」⁸⁴⁾という。

「広島」の歴史的な出来事は、大江の作品の中で「内面化」され、「核」を自分自身の問題としてとらえている」⁸⁵⁾といわれる。

大江は、「広島」に起った悲惨な歴史を通して、人間の残酷さを見たが、同時に被害者たちの生き方を通して「人間の正統性」を発見したのである。長男が障害児として生まれた直後、彼が「悲しみ」の中で訪ねたところは広島であった。これについて、大江は、次のように述べている。

私としては、この苦しみ体験を小説に書く、もう一度体験しなおすようにして検討してみなければ、自分がこれから生きて行くための体勢をととのえることができない、という思いだったのでした。この子供が生まれてすぐ、私は広島に行って原水爆禁止世界大会のルポルタージュの仕事をしたのですが……⁸⁶⁾

広島への訪問は大江に生きて行くための励ましを伝えてくれた切っ掛けに

83) 横井司「大江健三郎の〈キーワード〉-谷間の村」注25、前掲書、124頁。

84) 与那覇恵子「大江健三郎の〈キーワード〉-ヒロシマ」注25、前掲書、126頁。

85) 注84、上掲書、126頁。

86) 注32、前掲書、206頁。

なった。原爆の後遺症のため障害を持って生きている数多い人々の生き方を目撃したからである。「大江にとってこの長男・光の誕生は、広島に直結していた」⁸⁷⁾といわれる。安藤始は、大江の広島についての認識を、次のように述べている。

大江は祈りのひとつの仮説としてこの広島の現実を挙げていた。つまりそこでの体験者は、自分たちの生命のために闘っていて、「核の冬」を拒み、「生命の春」を守ろうとして運動し、その願いの声を発している。⁸⁸⁾

大江にとって、個人的な悲しみは歴史的な事件と社会的な状況と無関係ではなかったとみられる。「広島」という場所が「祈り」について具体的に考える切っ掛けになったのである。

被爆した若い妻には異常児を生んでしまうのではないかという不安とともに、出産後、自分自身が原爆症を発して死亡するのではないかという不安もまた濃く存在するのである。そして、それでもなお、このハイ・ティーンの娘は恋人をえて結婚し、出産したのだった。勇敢さ、それは人間の脆さと強靱さに、ともにかかわって、真に人間的だというべきであろうと思う。ハイ・ティーンで死んだ母親の、新しい赤んぼうが、純正な希望として成長しつづけることを祈る。⁸⁹⁾

大江は、広島を訪ねて、生命を諦めないで生きて行く人たちと会ったの

87) 注6、前掲書、239頁。

88) 注6、前掲書、239頁。

89) 大江健三郎『ヒロシマ・ノート』（岩波新書、1965）47頁。

である。「真に人間的」な光景を目撃した大江は、改めて作家としての使命を果たすのができたのである。

『人生の親戚』の中でみられる空間の設定は、日本からメキシコの農場まで移動されている。まり恵は死の直前までメキシコの農場で現地の貧しい女性のために力をつくした。それゆえ、聖女のように崇められたのである。メキシコの農場という空間の設定は、大江のメキシコ滞在の経験をもとで得られたのである。作家自身が滞在した経験のある空間の設定は、作家自身の救済にもつながっているのではないかと思われる。

大江は、メキシコに滞在した経験について「自分の生き方を根柢から検討し直さなきゃならないという気持ちに駆られて、四十一歳でメキシコシティへ行った」⁹⁰⁾という。生き方を検討しざるをえない状況の中で、向かった場所がメキシコであった。

メキシコの農場という空間は、先述した「谷間の村」のイメージを持っていると思われる。「谷間の村」は、「母胎的空間」のイメージを持っていながら、核時代の「核シェルター」のような役割を果たしているように、メキシコの農場もまた、そのようなイメージを持っているのではないかと思われるのである。まり恵の人生の救済において、もっとも肯定的なイメージの場所として描かれているからである。

また、メキシコ農場の経営者のセルジオ・松野は、世界二次大戦の当時、日本の徴兵を避けてメキシコの農場に定着した日本人の祖父の子孫である。戦争の「悲しみ」を避けて定着した「核シェルター」のような場所ともみえるのである。また、「日本ならテレビの朝のショーで大騒ぎされても、かえってそれだけ忘れられてしまう。しかしメキシコの農場でなら、一度話がひろまれば、もう石にきざまれたように記憶されつづけ、力を発揮しつづけもするはず」 [『人生の親

90) 注9、前掲書、117頁。

戚』209頁。]というセルジオ・松野の話も「記憶」という再生のイメージを示唆しているところであると思われる。

まり恵は、メキシコの農場で「自然な死」を迎え、自分自身を救済するようになる。「自然な死」は、自殺しない人間を表わし、大江が広島で感じていた「人間の脆さと強靱さ」の意味を含んでいると思われる。空間の設定により、救済のイメージを明確に表わす意図が窺えるのである。

2.2.2 死と再生をめぐる

大江文学における「死」のメタファーは、彼のすべての小説の中でみられる、といていいほど重要な意味を持っている。⁹¹⁾大江の小説に表わされている死の様相について今井清人は、次のように述べている。

そして、死は我々の日常が隠蔽してきた個体の限界と矛盾を露呈させる。「メメント・モリ」⁹²⁾とはきわめてラディカルな意識のパスワードのである。そのような死が、大江健三郎の小説に導入されているのである。たとえば、『セヴンティーン』『遅れてきた青年』『われらの時代』では、死を畏怖する自意識が、その過剰さゆえに天皇との一体感に陶醉し自己放棄するという倒錯、あるいは自己の生の確認のために自殺・自己放棄するという背理が提示されている。⁹³⁾

『セヴンティーン』や『遅れてきた青年』『われらの時代』などの作品の中

91) 今井清人「大江健三郎〈キーワード〉死と再生」注25、前掲書、133頁。

92) 広辞苑：「死を想え」「死を忘れるな」という意味の警句。古代ローマでは「今を楽しめ」という意味で言われたが、キリスト教世界では、現世のはかなさを覚え、来世に思いをはせるように勧める言葉となった。

93) 注91、上掲書、133頁。

に、政治的な信念による狂的な死の様相が描かれている。また、「自己放棄」の手段として自殺が用いられているのである。

大江の小説の中で、「自己放棄」の様相が見られる登場人物に「再生」のイメージを捜しにくい。むしろ狂的な死が持って来る破壊的なイメージを浮上させている。特に、六〇年代の政治状況を背景にしている『セヴンティーン』では、十七歳の少年の死に対する認識が描かれている。

眠りにおちいるまえにおれは恐怖におそわれるのだ。死の恐怖だ、おれは吐きたくなるほど死が怖い、ほんとうにおれは死の恐怖におしひしがれるたびに胸がむかついて吐いてしまうのだ。おれが怖い死は、この短い生のと、何億年もおれがずっと無意識でゼロで耐えなければならない、ということだ。この世界、この宇宙、そして別の宇宙、それは何億年と存在しつづけるのに、おれはそのあいだずっとゼロなのだ、永遠に！⁹⁴⁾

一七歳の少年は、死を「恐怖」と「ゼロ」として押えている。上で述べている「無としての死」は、恐怖の対象である。「なにもない所」、「無の世界」の死の世界は、上で描写しているように、「直線的時間意識」⁹⁵⁾として理解されている。大江の初期作品における死は、「直線的時間意識」として捉えられているが、中期作品にみられる死の様相は、「円環的時間意識」⁹⁶⁾として押えながら「再生」のイメージと結び付けられていると思われる。大江の文学世界における「円環的時間意識」の深化は、『人生の親戚』の中でみられる「死」の様相と関係づけることができると思われる。

『人生の親戚』で死の様相は、障害児の自殺という事件を通じて直面する

94) 大江健三郎「セヴンティーン」『性的人間』（新潮社、1968）141頁。

95) 注27、前掲書、60頁。

96) 注27、前掲書、60頁。

ようになり、死に断絶されている子供達よりも残されている親と周りの人たちを中心に描かれている。障害児の自殺という極端的な手段を通じて、残された人々に死と再生のイメージを対照して見せようとする作家の意図が窺える。

大江は、『ヒロシマノート』の中で、噂で聞いたある娘の自殺に関する自分の考えを、次のように述べている。

ある娘が偶然、自分のカルテに骨髄性白血病と書きこんであるのを読み、そして縊死した。僕はこういう噂に接するたびに、われらの国がキリスト教国でないことをせめても幸運に感じる。この不幸な娘を自殺への罪障感とその死の深みへまで追いかけてはゆかなかったであろうことを、ほとんど唯一の救済と感ずるのである。生き残るわれわれは誰も、彼女の自殺を道徳的に非難することはできない。ただ、われわれは、それでもなお自殺しない人びとの存在を心貧しく思いおこす自由をもつばかりである。97)

大江は、広島訪問の当時、原爆の後遺症で苦痛を背負って生きて行く人びとと、それを耐え抜けない状況に至って果ては自殺を選択する人々を目撃したのである。作家自身は「癌におかされるなら罪障感もいかなる地獄への不安もなく、縊死するタイプであるのかもしれない」98)と述べている。自殺した人びとの苦痛に同感しながら、「自殺しない人びとの存在」の生命の尊厳さを改めて痛切に感じていたのである。大江は、広島で気づいた自殺をめぐる問題について、次のように述べている。

広島は、それでもなお自殺しない人々の存在に、深く根源的で、徹底して人間的なモラルの感覚を見出しては勇気を回復するものである。…

97) 注89、前掲書、76頁。

98) 注89、前掲書、76頁。

(略) それでもなお自殺しない人びとのモラルは、われわれすべての者の普遍的なモラルであるはずではないか？そして広島の子殺者たちの、やむなく崩壊したモラルもまた、当然われわれと無縁でない。99)

大江は、自殺者たちの「崩壊したモラル」とわれわれと無縁ではないと示唆している。自殺による死は、「崩壊したモラル」といえるが、非難することができない「われわれと無縁でない」のである。『人生の親戚』の自殺した子供たちと自殺しないまり恵に、両方が「救済」に至る路程を見とどけ苦悩する作家の意識が窺える。それは、自殺による「死と再生」の問題を積極的に捉えるゆえのものである。

キリスト教の教理に基づいた「自殺への罪障感」は、『人生の親戚』の中で、解放されているようにみられる。障害児たちの自殺は、悲しみのない無垢の世界、いわば「天国」への希求の儀式のように行われたからである。しかしまり恵は、自殺しない人物として描かれている。それについてまり恵は、次のように語っている。

辛さは毎日続くし、今後もずっと続くかわかっているから、疲れがかさなり気の重さも深まるばかりの時、正直に言えば、これは自殺するほかないかな、と思ったりもしました。しかし、いつかもいったと思いますけど、私が自殺することは、他にはなんの役にも立たぬこの頭のなかで、ずっと生きているムーサンと道夫くんのイメージが破壊されることです。私は、現実にもムーサンと道夫くんを自己破壊させたのに、もう一度、自分の頭の中のムーサンと道夫くんまで破壊してしまう……それを思えば、自分の苦しきからは自殺もできません。

[『人生の親戚』142頁。]

99) 注89、前掲書、76頁。

まり恵の頭の中でずっと生きているムーサンと道夫のイメージは、まり恵の自殺できない理由であった。まり恵の二人の障害児たちの死は、彼女に破壊されない記憶を通して再生するイメージを持っている。まり恵が自殺を選択して物語を締め括っていない理由は、記憶という媒介を通じて死んだ二人の子供の再生を希求する意図であるといえよう。

まり恵は神の存在に対して確固たる信頼を持っていないが、再臨というエーーツの詩を通じて再臨のイメージを希望として受け入れている。まり恵はキリストの再臨という概念を通じて、道夫とムーサンの再臨の幻想を思い浮かべるのである。子供の死という永遠な断絶がもたらした苦痛の中で、再臨という言葉は、唯一希望の根源であるといえよう。このような再臨の願いこそ、作家の「円環的時間意識」を具体的に表わしている媒介ではないかと思われる。「円環的時間意識」は、『人生の親戚』の「死と再生」における救済のイメージを明瞭にしているといえよう。

なお、大江文学において、「死と再生」をめぐる救済の問題は、「回心」の問題と繋がっている。障害児の誕生をめぐる「回心」の物語が描かれている作品としては、まず『個人的な体験』^{バード}があげられる。障害児の父親である「鳥」は、「畸形の赤んぼうの生死の決定権を握っている（ようにみえる）のが父親」のように見られる。畸形の赤ん坊を殺すか、殺さないで共生するかの決定権を握っているのである。障害児の誕生で現実の逃避を試みる主人公^{バード}「鳥」は分裂的行動を繰り返し、果ては障害児との共生を選択する再生のイメージを見せてくれる。

障害を持っている赤ん坊を死なせるべきか、一緒に生きて行くかに関する選択は、文学世界だけではなく、現実世界でも難点であった。それは、大江の個人的な経験を越えて「人間の正統性」における本質的な悩みであるからだ。

「障害児との共生」という「鳥」の回心は、作家的な使命が込められた結末といえよう。

こういった回心は、大江文学における重要なモチーフになっている。また、再生のイメージを積極的に表わす文学的な概念であるといえよう。柴田勝二は、『人生の親戚』の中に窺われる回心の問題について、次のように指摘している。

『人生の親戚』のまり恵が求める「密議」の感覚は、まさにこうした特定の宗教、宗派の別を越えた「宗教的経験」であろうが、それを志向する人物を描出する大江の念頭に置かれていたであろうものが、コンバージョン（回心）の問題であることはいうまでもない。一九八〇年代の後半から大江が宗教への傾斜を強め、多くの作品でそれが表現されていくのは周知だが、その中でも大江がこだわりを見せているのは、人間が宗教に心を振り向ける契機に対してである。¹⁰⁰⁾

上で述べているように、まり恵の回心の問題が「宗教的経験」を切っ掛けとして表出されるが、それは『個人的な体験』の「鳥」の突然な回心と違う点である。

「死と再生」のモチーフは、大江の文学世界において重要な役割を果たしている。芳川泰久は、大江の作品における「死と再生」を作家の「回心」と結び付けて、次のように述べている。

「新しい人よ眼ざめよ」（八三年六月）に記しながら、小説家は「死

100) 柴田勝二「地上への回帰—女性のヴァイジョン」注11、前掲書、206頁。

と再生」に対して切実に向かい合っていないことを自覚する。裏を返せば、そのように記すとき、小説家はすでに「死と再生」への深い思念と省察のさなかにいる。重要なのは、この「死と再生」への思い立ちと、小説家の言う「自分の奥底」で用意された「重要な回心」が、ほぼ同じ事態を指しているということだ。101)

作品の中で、「死と再生」に向かい合うということは、「回心」を表わす重要な切っ掛けになるのである。大江が描いている魂の「死と再生」の問題は、『人生の親戚』を通して「宗教的経験」に触れられているが、それは神なき者の救済の可能性という問題と関わっているのである。102)

101) 芳川泰久「魂と暗喩・小説家の回心について—大江健三郎論—」注11、前掲書、183頁。

102) 注101、上掲書、205頁。

2.3 「救済」と「悲しみ」の再発見

大江の作品には、作家自身が影響を受けた文学作品の引用が目立つ。『人生の親戚』の中で、「僕」が語っている作品の内容が、まり恵の人生と緊密な関係にある。小説の中での小説という設定は、事実と虚構の区分を曖昧な境界に置こうとする作家の試みではないかと思われる。

作家は文学作品だけではなく、絵画の話をも用いている。『ヘンリーフォード病院』の絵を見たまり恵が、画家フリーダ・カーロの絵に関心を持つようになったのである。絵の中での光景を次のように語っている。

まり恵さんは、その『ヘンリー・フォード病院、一九三二年』という絵に興味を示していた。いくらか雲もある青空のもと、遠景に工場らしい建物のある戸外に、病院のベットが置かれている。横たわっているのは眉毛メスティゾの黒ぐろと濃い・混血らしい姿の女性で、下半身から出血している。

左脇腹からも、血管のように見える赤い紐が露出して、六つに分かれて伸びるその先には、臍の緒と胎児、カタツムリの首、蘭の花、スタンド、旋盤、そして大きい動物の骨盤が結びつけられている…

[『人生の親戚』202頁。]

上で述べているように、絵の光景は、平安をあたえる美しい絵ではなく、惨たらしい感情を引き起こしている。『ヘンリー・フォード病院』の中での「出血している」女性は、画家フリーダ・カーロ自身であった。フリーダ・カーロは一九〇七年に生まれ、一九五四年に四十七年の生涯を終えた。彼女はディエゴ・リベラというメキシコの有名な壁画画家の三人めの妻として結婚し、絵を描くようになった。彼女は子供のときに小児麻痺を痛んでいたため足が不自由で

あった。そして、十八歳のときに自動車事故に遭い、生涯三十二回の手術を受け、右足を切断せざるをえなかった。彼女は不幸な人生を生きて行く自身の姿を自画像に表わしたのである。大江は、フリーダ・カーロのように、「悲しみ」を積極的に引き受ける女性の姿をまり恵に投影して、救済の可能性を再発現したといえよう。

この絵を見たまり恵は、「心の傷も残している絵を勇敢に描きつづけたのは、…それもこんな堂どうとした様子でなしとげたということは、痛ましいというか、ヒロイックというか、ともかく本当に凄いわね」と言っている。まり恵は、フリーダ・カーロの生家を訪問して感慨にふけ、メキシコの貧しい農場に入る決心をする。

大江にとって自分の悲しい体験を小説で描き出すのは、フリーダ・カーロの「負傷自画像」ような、自己治療の手段になったといえよう。

おそらく大江健三郎は『新しい人よ眼ざめよ』を書き切ってから「負傷自画像」をある余裕を持って描けるようになったのだと思う。「悲しみ」を通して世界を見る態度は変らないもののその「悲しみ」を悲劇的に大仰に歌い上げるのではなく、むしろそれを生きる力、生き続けていくことの歓びのほうへと変えていくポジティブな方向へ大江健三郎ははっきりと向かい出したと思う。103)

大江が障害児との共生をとらえている『新しい人よ眼ざめよ』を終わらせてから「負傷自画像」を「余裕を持って描けるようになった」というのが、共感を呼び起こす。「悲しみ」の物語を悲劇的に捉えずに、生きていく能力と肯定的な側面を強調しているのである。

大江の文学世界で描かれている救済は、他の文学や芸術を通じて深みを加え

103) 注11、前掲書、160頁。

られており、「救済」における「悲しみ」を改めて再現している。大江の「ヒロシマ」体験は、世界の「悲しみ」を目撃したのであるが、個人の「悲しみ」を乗り越える能力を与えてくれたのである。大江が接した文学作品や体験によって、生きて行くことができない際の「悲しみ」が生きて行く能力を与えてくれる点で、「悲しみ」の位相が再発見されているといえよう。

2.3.1 「救済」の文学

『人生の親戚』の中で「僕」は養護学校に通う障害児の父である作家であり、倉木まり恵の人生を映画化するためにシナリオを書くことになるという設定から物語が始まる。このように文学と関わっている作家という語り手の設定が目立つ。

大江の作品の中には「僕」という一人称の語り手で書かれているものが多い。一人称の中でも「僕」「ぼく」「私」「わたし」「おれ」「わし」など多様な主格が使われている。その理由を考えると、大江の多くの作品は、作家自身が経験した出来事に基づいて書かれたものが多いからであるといえよう。大江の自伝的な小説『懐かしい年への手紙』は、「僕」が作家であり、Kちゃんとして呼ばれている。『人生の親戚』の「僕」が作家Kと呼ばれるのと同様である。

大江の小説は、作家自身とも見られる「僕」という語り手によって語られているゆえに、小説の内容が読者には事実そのものように理解される。大江の個人的な問題が文学という枠の中で、救済を求める過程においては、そのなかでまた他の文学作品を言及し、救済への方向性を模索する。このような「私小説」的傾向は、大江文学の大きな特徴であるといえよう。

大江の一九八〇年代作品における傾向について井口時男は、次のように述

べている。

短編群のすべては、作家・大江健三郎自身を思わせる設定の一人称「僕」によって語られている。したがって、この時期をまた、大江的「私小説」の時代、と呼ぶこともできる。これらはまさしく、大江的といえないような特質をそなえている。104)

大江が扱っている「私小説」の型式は、日本文学史における伝統的な「私小説」105)とは「普遍的な主題」を捉えているという点で違う特徴を持っている。それが、「大江的私小説」という言葉として指摘されているのである。このように「僕」という語り手が作家大江を連想させるといった点は、文学の引用に新しい意味を与える装置になると思われる。言い換えれば、文学の引用が、ただ他の作品を紹介するのではなく、「大江的私小説」の方法により、文学の虚構の限界を乗り越える役割を果たしているということである。

上で述べたように、大江を連想させる「僕」は、作家であり、文学の様々な引用を通してまり恵の魂の傷を理解しようとする人物である。「僕」は、バルザックの小説『村の司祭』のヴェロニックとまり恵を重ねて考えている。『村の司祭』は、ヴェロニックの受難が罪から生じて、それに対する公開懺悔を通じてあばたで醜くなった顔が、また美しさを取り戻すという物語である。罪を犯したヴェロニックとまり恵を比較したことについて「僕」は、次のように語っている。

そのように妻がいう気持の底には、『村の司祭』をまり恵さんにすすめた時、まり恵さんにふりかかった辛い事故と、ヴェロニックの犯した罪から来

104) 注35、前掲書、104頁。

105) 日本文学研究資料刊行会『私小説』（有精堂、1983）301頁。「小説の一体で、作者自身が自己の生活体験を叙しながら、その間の心境を披瀝してゆく作品。社会化されない個人の生活に限定された作風を生んでいると指摘された。」

るものとはちがうといった、その抗議の思いがくすぶっていたはずだ。僕も、メキシコ・シティの陰気なアパートでひとり暮らしをしている間、根拠もなくまり恵さんとヴェロニックを結んで考えることがあったのだと—あえていえば、障害を持っている子供が自殺したとすれば、それを自分は、かつて犯したいかなる罪よりも大きいものに受けとめるほかないだろうと、おののくようにして考えたのが、心理的な根拠といえば根拠だったと—朝雄君たちに説明しておきたいと思った。 [『人生の親戚』103頁。]

まり恵が経験した障害児たちの自殺は、親として「かつて犯したいかなる罪よりも大きいものに受けとめるほかない」と「僕」は考えたわけである。「僕」の夢の中でまり恵の苦痛が顔にあばたの跡で現されているのは、ヴェロニックの姿を連想するようにしている。

このようにまり恵が体験した「内面の破壊」は、『村の司祭』の女主人公ヴェロニックの姿と対比されているのである。『村の司祭』は、罪のために破壊されたヴェロニックの顔が「公開懺悔」を通して許されると、美しい顔を回復されたという、「不可能なことが可能になるモチーフ」をとらえている作品である。

「僕」が『村の司祭』を考えたのは、「まり恵さんが、こうむった心の傷からの回復は、それこそ不可能なことを可能にする、大変な作業だから」 [『人生の親戚』104頁。] である。また、『村の司祭』の「ヴェロニックの大規模な灌漑事業」が、『人生の親戚』の「まり恵の農場の事業」として、現されている。両者は、救済の過程で提示されているのではないかと思われる。ヴェロニックの顔の美しさを捜すという発想は、まり恵の「内面の破壊」の救済のイメージとして再現されているのである。

また、実在する文学世界の一軸として、オコナーの物語も引用されている。オコナーの人生に感動を受けたまり恵には、二人の子供の死を経験した後にも、

オコナの作品に対して続けて言及している。実存人物であるオコナーの存在を通して、虚構の人物であるまり恵の救済の問題が続いて扱われているのである。

アメリカの作家フラナリー・オコナーは、「文学史的には、O・ヘンリー賞を四度受賞した“短編の名手”である」といわれる。フラナリー・オコナーの作品世界について池上冬樹は、次のように述べている。

実際読んでみれば、個々の構成は緻密であるし、終盤にかけての緊張感の盛り上がりはぞくぞくするけれど、でも読んでいる間も読後も、卓越した技巧に目はいかない。読む者を不安にさせる不気味なイメージと眉を顰めるような展開に圧倒されるからだ。…（略）不安と恐怖を増幅する状況の力、絶望へと追い込む内なる狂気の暴走、そして深層意識に眠る暴力行動が傑出している。とりわけの暴力、特権的な形で表現される暴力を、オコナーはまるで神の恩寵のように感得させるからおそれいる。106)

このようにオコナーは、不条理の現実世界、例えば、黒人と障害者への差別と富裕階級の奢りなどを神の摂理として把握している。むしろ暴力の世界を「神の恩寵」のように感じ取っているのである。このようなフラナリー・オコナーの作品は、暴力の世界を生きて行くまり恵の生き方に大きな影響を与えたのである。

倉木まり恵は、アメリカの作家フラナリー・オコナー研究者である。しかし、オコナーの作品にまり恵が心ひかれたのは、実際のオコナーの人生のためである。若い作家であったオコナーは、赤斑性狼瘡という不治の病におかされ、肉

106) 池上冬樹「『フラナリー・オコナー全短編』ノワールの源流」『文学界』2003年9月号、299～301頁。

体の苦難を神の摂理として受け入れている知性の女性であった。まり恵は、不幸の中でも作品活動を諦めないで、作家としての使命を果たしたオコナーの人生に感動していたのである。まり恵は、オコナーのように自身の「悲しみ」を積極的に引き受けて、メキシコの貧しい農場の女性のために残った命を捧げ、果ては「聖女」のように崇められる人となった。

オコナーは、不条理な現実世界を神の摂理として把握しているが、まり恵は、最後まで信仰について肯定も否定もしない「神なき者」の姿を見せている。むしろ、自分自身が「聖女」と呼ばれるようになったり、「回心」によって自己自身を救済したりするような様相が見られる。まり恵の人生が実際のオコナーの人生とオーバーラップされている。それは、オコナーの自己救済のイメージをまり恵に投影したのだといえよう。

『人生の親戚』において文学の引用は、エイーツの詩、ダンテの『神曲』、聖書に至るまで幅広い文学世界を見せてくれる。エイーツの詩集を聖書の脇に置いて、ひがな一日、「The Second Coming!」という叫び声を発するまり恵は、宗教よりも、エイーツの詩に頼っているようにみられる。エイーツの詩『再臨』を通して、「救済」の問題を喚起しようとする作家の意図が窺えるところである。大江は、自身の初期作品から頻繁に用いられる文学の引用を言及し、作家としての「引用への偏愛」¹⁰⁷⁾があるのに気づいたという。そのような文学の直接の引用は、「現代の新しい大江小説の中で神秘の力を発揮している」といわれる。

『人生の親戚』の中で、救済の問題に係わる文学の引用も、重要な役割を担っていると思われる。時代を越える幅広い文学世界を通して、人類が担っている「悲しみ」を探り当てて、果ては、またその中で「救済」の可能性を見出しているのである。

107) 大江健三郎『私という小説家の作り方』（新潮社、1998）107頁。

2.3.2 「悲しみ」と「救済」の再認識

大江は、四国の森の中の谷間に生まれ、都市に出てフランス文学を中心に、西欧の文化を学んだものの、つねにそのような学問は自分にとって仮のものだ、自分の本質には無関係だ、という思いがあったという。108)ブレイクの『四つのゾア』の次の一節は、大江が生きてゆくこと全体への、キイ・ノートのようにであった。

《人間は労役しなければならず、悲しまねばならず、そして習わねばならず、忘れねばならず、そして帰ってゆかなければならぬ／そこからやって来た暗い谷へと。労役をまた新しく始めるために》109)

上の一節は、大江にとって「生きてゆくこと全体への、キイ・ノート」であると呼ばれるほど、大きな影響を与えたと思われる。ここで、「悲しまねばならず」という一節は、大江が作品の中で、「悲しみ」を通して世界を見ていることと無縁ではないといえよう。

大江は、『人生の親戚』が発表された一九八九年に行われた「生と死の境界、そして文学」という討論の中で、次のように述べている。

小説家とはどのように生きていくものかということ二十世紀に一番典型的に表していた人はウィリアム・フォークナーじゃないかと思いますが、そのフォークナーの生涯において、自分が危機にあることの認識の仕方、その乗り越えの仕方ということが、同じ形で繰り返されていると僕は思っています。110)

108) 大江健三郎『小説のたくらみ、知の楽しみ』（新潮社、1985）120頁。

109) 注108、上掲書、120頁。

大江は、小説家の生き方の典型についてウィリアム・フォークナーの例を挙げ、「危機の認識」と「乗り越えの仕方」が同じ形で繰り返されることを指摘している。詳しく言及しているフォークナーの人生と文学は、大江の作品に影響を与えたと思われる。

この対談の中で、ウィリアム・フォークナーの『野生の棕櫚（ワイルド・パームス）』について大江が言及しているのが興味深い。『野生の棕櫚』の中で、医大生である主人公の青年は、苦しみつつ妊娠した恋人の中絶手術を行い、手術途中、彼女を死なせてしまう。死んだ彼女のお兄さんがやってきて毒薬を差し入れようとするが、主人公は拒否する。その拒否の理由について、大江は次のように話している。

そこで彼が言うのは、思い出というのはふたつあって、彼女が持ってる部分の思い出と自分の持っている部分の思い出がある。彼女はもう死んでしまったから半分なくなった。そして自分が死んでしまったら思い出のもう半分もなくなる、つまりゼロになってしまう。ナッシングネスということと自分の今の悲しみ、グリーフということとどちらをとるかという、自分はナッシングネスよりはグリーフをとるといふんです。111)

フォークナーの作品の主人公が語っている「ナッシングネスよりはグリーフをとる」ことは、作家フォークナーの人生とも無縁ではなかったと大江は述べている。

「グリーフ（悲しみ）」をテーマにした大江の小説はフォークナーからも影響を受けているといえよう。『人生の親戚』の中で「ナッシングネスよりはグリーフをとる」人物として、まり恵が登場している。まり恵は、二人の息子の死を現実

110) 注49、前掲書、165頁。

111) 注49、前掲書、165頁。

受け入れる過程の中で、離婚した夫サッチャンに次のように語っている。

…私はどんなにか疲れて、自分にはもうなにも残ってないと考えても、死んでしまうことはできないわ。そんなことをすれば、道夫さんとムーサンが、あんな苦しんで思いつめて死んだことを覚えている人が、サッチャンだけになるものね。 [『人生の親戚』72頁。]

まり恵は、死んだ子供たちを覚えるために、生き延びる方を選択する。「ナッシングネスよりはグリーフをとる」姿勢がまり恵にも現されているのである。彼女は、メキシコ行きを決心する時、手紙を通して、「私がどのように生きてみても、やはり死んだ子供たちへの思いから逃れられないのなら、正面から子供たちの不幸を担いなおして、農場で自他ともにそれを認めつつ働くことこそ、なにより自然な生き方ではないか」 [『人生の親戚』209頁。]と述べている。このようなまり恵の発言は、「悲しみ」を正面に引き受ける態度が究極的に到達しようとする救済の可能性を意味していると思われるところである。「悲しみをとる」態度は、積極的に現実を受け入れようとする大江の作家的な信念であると思われる。

大江の個人的な「悲しみ」が反映されているとみられる作品の中で、同一なモチーフの『個人的な体験』と『空の怪物アグイー』が目立つ。正反対の設定で締め括っているのについて大江は、次のように述べている。

たとえば僕は、現在の長篇小説にとりかかる前に、そのころ僕をとらえていたもっと直接的なジレンマに喚起されて、ひとつの長篇小説と短篇小説とを書いた。それらは、問題への接近の仕方が正反対の、ふたつの小説であった。すなわち、『個人的な体験』と『空の怪物アグイー』で、前者は、ともかく最終的には、畸型の赤ん坊を正面からひきうけて

生きようとする人間をえがくものであったし、後者は、畸型の赤ん坊から逃れたあと、結局、自殺めいた疑わしい死へと自分を追いこんでしまう人間をえがくものであった。それらの出版のあと、僕はこの問題に関するかぎり、自分がすでに、ひとつの救済を体験しているのを感じた。112)

障害児の出生という問題を抱えていた作家自身は、二つの違う結末を通して「ひとつの救済を体験しているのを感じた」と述べている。『個人的な体験』の中で、^{パート}「鳥」の選択は、畸型の赤ん坊との共生であったが、『空の怪物アグイー』の作曲家Dは、「畸型の赤ん坊から逃れたあと、結局、自殺めいた疑わしい死へと自分を追いこんでしまう」破滅的なイメージとして描かれている。

大江が「ひとつの救済を体験しているのを感じた」のは、『個人的な体験』と『空の怪物アグイー』二つの作品を書いた後であるという点に注目すべきである。後者の場合の絶望的な結末も「死の可能性」を積極的に受容して、作家が述べている「救済」の根拠を提供しているのである。『空の怪物アグイー』の中で死んだ「畸型の赤ん坊」が空を飛んでいる幻想は、死んだ後でも「別の宇宙」に生きていく「再生」のイメージを持っているのである。この障害児の「死と再生」のモチーフは、改めて『人生の親戚』のハイティーンに近く成長した障害児を通して蘇っているのである。

『人生の親戚』が、これまでの作品とは違う理由は、「悲しみ」と「救済」の再認識という点で確認することができよう。『個人的な体験』の「自己救済」の様相は、障害児の手術が成功し、小説の最後で「扉に＜希望＞という言葉を書いて贈ってくれたバルカン半島の小さな国の辞書で、最初にく忍耐」という言葉をひいてみるつもりだった」113)という^{パート}「鳥」の決意で締め括って

112) 注65、前掲書、152頁。再引用

113) 注22、前掲書、252頁。

いる。ここで「希望」という言葉が象徴しているようなハッピーエンドは、『人生の親戚』で現れているまり恵の人生とは違う結末であるといえよう。『人生の親戚』の中では、「希望」という言葉より、「悲しみ」という言葉を取っているのである。また、まり恵の死は、『空の怪物アグイー』の自殺のように死んだ主人公の男性が見せている死のイメージとは、違うと思われる。

生涯の最後、まり恵が、自身の物語で映画を作る人々に映画のタイトル案として「" Parientes de vida "」という言葉を示し、「僕」は、それを「人生の親戚」と訳している。小説の最後で、「僕」は、このタイトルについて、次のように語っている。

…プルタルコスで、どのような境遇にある者にもつきまとう、あまりありがたくない「人生の親戚」と、悲しみのことを呼びなしている箇所に出あった。いま僕は、こちらの解釈にかたむいている。ともあれ野外スクリーンにまり恵さんの生涯のフィルムを見る、インディオや混血メステイノの女たちは、“ Parientes de vida ”というスペイン語の意味を、そのまま受けとめえるはずのものなのだ。 [『人生の親戚』240頁。]

「" Parientes de vida "」という言葉は、「農場のインディオや混血メステイノの女たちが悲しいことに会うたびに発する」のであると言っている。まり恵が、自身の物語の映画のタイトルとして、「悲しみ」を意味する「人生の親戚」という言葉を示したのは、小説の全体に流れている「悲しみ」の感情と重なっているに違いない。

作家は、まり恵の生涯で、人生の基底に置かれている「悲しみ」を乗り越える「救済」の可能性を捉えているのである。「悲しみ」を避けようとする人物で

はなく、「悲しみ」を積極的に引き受ける人物像を通して、救済の可能性を発見したのではないかと思われる。

フォークナーが述べている「ナッシングネスよりはグリーフ（悲しみ）をとる」態度が、語り手である「僕」にも、まり恵の生涯にも現れているのである。「僕」は、小説の最後で「悲しみ」にみちた倉木まり恵の生涯を「自分の物語として了解できるように書いてしまっている」と述べている。倉木まり恵の生涯を、映画のシナリオとして、また大江の自伝のような小説として表わしているのは、改めて「救済」の可能性を再確認しようとする作家の試みであったといえよう。

『人生の親戚』は、川本三郎によると、「オーバーといってもいい悲惨の連続である、オーバーになりつづけることでしか表現しえない現代の不条理な悲しみを語った」小説である。大江自身も「『人生の親戚』という小説は特別な書き方で書いた」と述べているとおり、これまでの作品とは違う性格を有する。本研究は、このような『人生の親戚』において、「悲しみ」の極大化と、「救済」の方法の提示とが、どのような関わりを持っているのかに着目して論を進めてきた。

大江は、『人生の親戚』を通して「現代の不条理な悲しみ」を示すと同時に、「救済」の問題を積極的に取り扱っている。作家の鬱病のような状況の中で、「救済」の可能性を提示してくれた『人生の親戚』は、「悲しみ」を治療する「救済」の物語として書かれたともいえよう。

『人生の親戚』の中でみられる「悲しみ」の問題は、主人公の倉木まり恵と彼女の二人の障害児たち、また彼らの観察者としての語り手の「僕」を中心に展開されている。まり恵は、「悲しみ」にみちた人生の中で、「神話的な再構成」によるヒロイックな女性として描かれている。これまでの作品とは違って、女性を主人公として取っついでながら、新しい母親像を示している。彼女の二人の息子は、それぞれ障害を持っている人物として、「光」とともに障害児たちの「悲しみ」の世界を見せている。語り手である「僕」は、まり恵の家族の「悲しみ」に誰よりも敏感に反応しながら、不条理な「世界の悲しみ」を認識している作家である。

最近、大江は『人生の親戚』の次の作品である『治療塔』（一九九〇）を再読した際に、「その細部にはじまり全体のほとんどあらゆるところに充ちている悲しみの感情に驚いた」という。障害を持っている長男光の出生以後、重要なモチーフとして捉えてきた「悲しみ」の問題が、『人生の親戚』の中で、障害児の自殺問題をめぐる事件を通して、終末と核時代の危機のような「世界の悲

しみ」まで拡大されている。障害児たちの自殺が伝えてくれた「世界の悲しみ」は、作家が描こうとした「歴史認識」と密接な関係にある。

大江の文学世界を支えてきた「歴史認識」は、一人の女性である倉木まり恵の「悲しみ」にみちた人生にも「ひそかに保たれている」のである。小説の冒頭で「僕」は、「広島原爆被災をめぐる本を一冊、書いているのである」と語っている。実際、大江が障害児である長男光の出生と根強い関わりを持っている「広島」の体験は、作家に「救済」の道を提示してくれたキーワードになってきた。このように、個々の極大化された「悲しみ」の問題が、「世界の悲しみ」まで幅広く抱えている点は、作家の作意を窺えるところである。

「救済」の問題については、まり恵が自己救済を求める過程を中心に考察してみた。宗教的なイメージを積極的に扱っている点で、これまでの作品とは違う性格を有すると思われる。宗教性の強い「集会所」という場所で、まり恵の行動は、「信仰を持たない者」として描かれている。まり恵は、指導者が死亡した際に、危機的な「集会所」の中の娘たちを救済するヒロイックな女性指導者の姿を見せている。

次に、まり恵の人生が救済を求める過程を、自己救済の闘争という点で、大江のこれまでの作品と比較しつつ考えてみた。空間の設定は、『人生の親戚』の中で、救済の問題における主要な役割を果たしていると思われる。まり恵がメキシコの農場で、まずしい女性たちのために命を捧げたのは、象徴的な意味を持っている。メキシコという場所は、作家にとっても救済を求めるために滞在したともいえる場所である。大江は、「自分の生き方を根柢から検討し直さなきゃならないという気持ちに駆られて、四十一歳でメキシコシティへ行った」と述べているのである。また、農場という設定は、「谷間の村」を連想させる「母胎的空間」のようなイメージを持っている。生命を象徴する空間としての設定であることが認められる。また、「死と再生」という大江文学における主なモチーフ

は、『人生の親戚』の中で、障害児の自殺をめぐる「記憶」と「回心」を通して再現している。まり恵の破壊されない「記憶」を通して、死んだ子供たちは「再生」のイメージを持つようになり、まり恵の犠牲でみられる「回心」を通して、改めて救済に至る可能性を示しているのである。

そして、『人生の親戚』の中で、「悲しみ」と「救済」の問題を緊密に結び付けている作家の意図を考察した。語り手である「僕」が、大江を連想させる点で、文学の引用が重要な役割を果たしているのを確認した。作品は、現実の作家の生き方にもとづきながら、虚構の小説で「救済」の可能性を発見する方法を模索している。様々な文学の引用が、「悲しみ」と「救済」を再発見する通路になっているのである。フォークナーが述べている「ナッシングネスよりグリーフをとる」態度を通して、「悲しみ」を積極的に受け入れることこそ、「救済」の可能性を開くことであると物語っている。「悲しみ」を人生の基底に置いている作家の意図が窺えるところである。

逆説的ではあるが、「悲しみ」があるゆえに「救済」が求められる。このような問題意識は、「救済」をめぐる「危機と闘争」を繰り返し、究極的には「悲しみ」の再発見をもって物語を締め括っているのである。

なお、大江の文学世界における「悲しみ」と「救済」の問題は、『人生の親戚』で転換期を迎え、『静かな生活』『治療塔』『燃え上がる縁の木』

チェンジリング

『取り替え子』などのような作品まで及んでいると思われる。

◆ 参考文献

【単行本】

- 安藤始『大江健三郎の文学』、おうふう社、2006
- 井口時男『危機と闘争 大江健三郎と中上健次』、作品社、2004
- 一条孝夫『大江健三郎—その文学世界と背景』、和泉書院、1997
- 大江健三郎『あいまいな日本の私』、岩波新書、1994
- 大江健三郎『大江健三郎・再発現』、集英社、2001
- 大江健三郎『大江健三郎作家自身を語る』、新潮社、2007
- 大江健三郎『個人的な体験』、新潮社、1964
- 大江健三郎『小説のたくらみ、知の楽しみ』、新潮社、1985
- 大江健三郎『人生の親戚』、新潮社、1989
- 大江健三郎「セヴンティーン」『性的人間』新潮社、1968
- 大江健三郎『空の怪物アグイー』、新潮社、1964
- 大江健三郎『治療塔』、講談社、1990
- 大江健三郎『「話して考える」と「書いて考える」』、集英社、2004
- 大江健三郎『ヒロシマ・ノート』、岩波新書、1965
- 大江健三郎『私という小説家の作り方』、新潮社、1998
- 大隈満・鈴木健司『大江健三郎研究—四国の森と文学的想像力—』、
リーブル出版、2004
- 川本三朗『大江健三郎』、小学館、1995
- クラウドプロトックウォラック『大江健三郎論「狂気」と「救済」を軸にして』、
専修大学出版局、2007
- 桑原丈和『大江健三郎論』、三一書房、1997
- 島村輝『大江健三郎』、若草書房、1998
- 篠原茂『大江健三郎文学辞典』、森田出版、1998
- 蘇明仙『大江健三郎論—〈神話形成〉の文学世界と歴史認識—』、花書
院、2006
- 中村泰行『大江健三郎—文学の軌跡』、新日本出版社、1995
- 日本文学研究資料刊行会『日本文学研究資料叢書—安部公房・大江健三
郎』、有精堂、1974

日本文学研究資料刊行会『日本文学研究資料叢書—私小説』、有精堂、
1983

洪珍熙『大江健三郎論』、JNC、2005

マサオ・ミヨシ 他『群像 日本の作家23 大江健三郎』、小学館、1992

【論文類】

「特集・大江健三郎—その神話的世界」『ユリイカ』1974年3月号

「特集・大江健三郎—神話的宇宙を読む」『国文学—解釈と教材の研究』1983年6月号

大江健三郎・河合隼雄「生と死の境界、そして文学」『文学界』1989年8月号

「特集・大江健三郎—八〇年代から九〇年代へ」『国文学—解釈と教材の研究』1990年7月号

「特集・大江健三郎の文学」『文学界』1994年12月号

「特集・ノーベル文学賞受賞 大江健三郎」『新調』1994年12月号

「特集・大江健三郎」『文学』1995年春

「特集・21世紀にむけていま大江健三郎の小説を読む」『国文学—解釈と教材の研究』1997年2月号

福田和也「大江健三郎と自殺者たち」『文学界』1999年9月号

若林一美「死別による悲しみ—セルフヘルプグループの役割について—」
Vol.3(20041200)『山梨英和大学紀要』山梨英和大学

池上冬樹「フラナリー・オコナー全短編ノワラーの源流」『文学界』2003年9月号

坂本忠雄「上質さをそなえた秀作」『中央公論』2008年7月号

伊藤久美子「大江健三郎『人生の親戚』の語り手」『文学研究』2007年4月号

鈴木恵美「大江健三郎『人生の親戚』論—まり恵の生き方について」『日

本女子大学大学院文学研究科紀要』2007年号

川邊紀子 「『ヒロシマ・ノート』と『人生の親戚』—大江健三郎の〈文学的想像力〉について」 『白百合女子大学言語・文学研究センター言語・文学研究論集』2003号

河合隼雄、鶴見俊輔、大江健三郎 「『人生の親戚』との付き合い方」 (時代を読む) 『潮』1991年4月号

一条孝夫 「大江健三郎と川端康成」 『帝塚山学院大学研究論集.文学部』Vol.42(20070000)

ABSTRACT

A study of 『Zinseino sinseki』
- An analyses of 「sorrow」 and 「the relief」 -

hee jung - Nam
Department of Japanese
Language and Literature
Graduate School of
Sungshin Women's University

At the same time when I let pass Oe with "the relative of the life" and speak "modern absurd sorrow", I handle a problem of "the relief" positively. In the situation such as the depression of the writer it was written as a story of "the relief" that "the relative of the life" who showed possibility of "the relief" treats "sorrow".

The problem of "sorrow", a main theme of "the relatives of the life", is developed by Kuraki Marie of the chief character and her two handicapped children and a narrator "me" as their observer. A woman called Marie is not a ordinary type of person but the special one who is set as a heroic woman by "a mythical reconfiguration" in order to maximize "the sorrow that is modern absurdity".

When Oe recently repeated to read the "treatment tower" (1990 Kodansha) written after publishing "the relative of the life", he mentioned that I was surprised at feelings of the sorrow that began in the details and rose almost in every place of the whole. He has treated the problem of the "sorrow" as an important motif after his eldest son Light was born with an obstacle. The problem of the "sorrow" is enlarged to "the world sorrow" such as the end of the world and a crisis in the nuclear age through a problem over the suicide problem of the handicapped child among "the relatives of the life".

"the world sorrow" that suicide of handicapped children conveyed is close to historical recognition that the author was supposed to draw. The historical recognition is supported the literature world of Oe, and it is "kept secretly" in the Kuraki Marie's life which is full of "the sorrow". At the beginning of the book, "I" felt that I wrote a book about the atom bomb suffering of Hiroshima. Actually, the experience of "Hiroshima" which is deeply related to the birth of his disabled son Light has been a pivotal factor to show a way of "relief" to him. Therefore, as the problem of "sorrow" is dealing with its meaning in global as well as in personal life, I presume that it gained the meaning of universality.

In this book, the problem of "the relief" was discussed through the process Marie was searching for her self-relief. It seems to differentiate from the previous works with regard to religious factor. Marie is depicted as a person who does not

have faith, reflecting her behavior as the highly religion-related "meeting place". Marie revealed her heroic matriarch characteristic as she relieved daughters from the crisis-ridden "meeting place" where the leader was dead.

Compared with characters in other Oe's books the Marie's relieving process shows the different personality; the struggle for her own self-relief. Space setting plays an important role in the problem of the relief. It has a symbolic meaning that Marie has sacrificed her life for helping poor women in a Mexican farm. Mexico is a place where the author had stayed for working out his own salvation. The setting also has an image of "space of the basis", which evokes "the village of the valley" and represents the place of life.

In addition, the motif of "death and the reproduction" primarily depicted in the Oe's literature is portrayed by "memory" and "conversion" of the suicide of the disabled child in "the relatives of the life". It also indicates that the dead children show the possibility of salvation through Marie's undestroyed memories and her way of conversion.

I paid attention to the author's intention to deal with "sorrow" and the problem of "relief" in "the relatives of the life". "I" as a narrator is seeking the possibility of salvation in this book and the author's way of salvation by using quotation of the literature. But it is a way to uncover "sorrow" and "relief" as well. I think the way to "prefer sorrow to no strikes and no ballsness" symbolizes salvation as accepting "sorrow" without hesitancy. It seems that the author deliberately put the nature

of "sorrow" at the bottom of the life.

Paradoxically, because there is "sorrow" we seek to a way of salvation. Such a critical mind repeats a cycle of "crisis and struggle" over "the relief", and the story ends with rediscovery of the implication of "the sorrow".